

---

寄 居 町

---

# 銭小田遺跡／伝旧不動寺跡

---

ホンダ寄居新工場建設関係埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 9

本田技研工業株式会社  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



銭小田遺跡



伝不動寺跡

わし まる やま

## 鷲丸山の遺跡

本書は、寄居町の東南、鷲丸山を中心とする掌状の尾根の上に発見された錢小田遺跡と伝不動寺跡の報告書です。両遺跡とも、ホンダ寄居新工場の建設に伴って発掘調査が行われました。

錢小田遺跡は、鷲丸山から北北東に延びた尾根の先端近く、標高135m程の比較的平坦なところで発見されました。わずか600㎡の調査でしたが、縄文時代中期後葉（約4,500年前）の竪穴住居跡1軒と、同じく縄文時代と思われる土壇4基が見つかりました。狩猟などの際のキャンプ地として使われたものと思われます。

伝不動寺跡は、同じく鷲丸山から北に延びる尾根の東側に造られた<sup>ひらば</sup>平場で、名前の示すとおり、かつて不動寺があり火災によって現在の場所に移ったと言いつた所です。今回の調査によって、火災の痕跡は確認されず、また出土した遺物からも移転の事実是否定されましたが、古くより不動寺に関わる施設が置かれていたのは確かなようです。

## 序

埼玉県北西部、秩父地方の入口に位置する寄居町は、古くから秩父往還の街道筋の宿場として栄え、現在も国道140号線（秩父街道）や254号線、JR八高線、東武鉄道、秩父鉄道などが交差する交通の要衝であります。また、考古学的にも、太古からの人々の生活の跡が数多く残された遺跡の宝庫であり、鉢形城や花園城をはじめとする中世城郭が点在することでも知られております。

そして何よりも、それら人々の営みの背景には豊かな自然があります。秩父山系に連なる緑の山々、荒川の造形による長瀨の石畳や名勝玉淀の妙景、そして風布の山麓より湧き出る「日本水」は、日本の名水百選に数えられております。

このたび本田技研工業の新工場が寄居町に建設されることになりました。広大な新工場の建設は、自然と歴史に恵まれた寄居の地に、さらに人と地域の活性化を与えるものと言えましょう。建設が予定されている富田地区は、今まで大きな開発はありませんでしたが、新工場予定地内に埋蔵文化財の存在が確認されました。その取り扱いについては、関係諸機関が慎重な協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、本田技研工業株式会社の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、銭小田遺跡では縄文時代の竪穴住居跡が、伝不動寺跡では尾根上の平場に建物と庭園の跡が見つかりました。特に後者は、伝承とは異なっていたものの、中・近世の寺院関連遺跡のあり方を知る上での貴重な調査例となりました。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました本田技研工業株式会社、寄居町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 刈 部 博

## 例 言

1. 本書は、埼玉県大里郡寄居町に所在する銭小田遺跡及び伝不動寺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

### 銭小田遺跡（ZNKD）

大里郡寄居町大字富田字銭小田 2292 番地  
平成 19 年 11 月 12 日付け 教生文第 2-46 号  
伝不動寺跡（DNKFD）

大里郡寄居町大字富田字鷲丸下 2364 番 3  
平成 19 年 11 月 12 日付け 教生文第 2-46 号

3. 発掘調査は、ホンダ寄居新工場建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育委員会及び寄居町教育委員会が調整し、本田技研工業株式会社の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業も同社から委託を受け、当事業団が実施した。

4. 各事業の委託業務名は、下記のとおりである。  
発掘調査事業（平成 19 年度）

「ホンダ寄居新工場建設予定地に係る埋蔵文化財発掘調査」

整理報告書作成事業（平成 20 年度）

「ホンダ寄居新工場建設予定地に係る埋蔵文化財発掘調査（整理）」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、1-3 の組織により実施した。

発掘調査は、下記のとおり実施した。

### 銭小田遺跡

期間 平成 19 年 10 月 1 日～10 月 31 日

担当 新屋雅明・今関久夫（寄居町教育委員会生涯学習課）

### 伝不動寺跡

期間 平成 19 年 10 月 1 日～12 月 28 日

担当 山本 禎・田中広明

整理報告書作成事業は、平成 20 年 11 月 1 日から平成 21 年 1 月 31 日まで宮井英一が担当して実施し、同年 3 月に事業団報告書第 359 集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量及び空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は新屋・今関（銭小田遺跡）、山本・田中（伝不動寺跡）が行い、出土品の写真撮影は鈴木孝之と宮井が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は宮井が行い、鈴木・西井幸雄・上野真由美・矢田美知子の協力を受けた。
9. 本書の執筆は、1-1 を寄居町教育委員会生涯学習課・埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、II を澤口和正、III-2 を上野、IV-1 と 2（1）～（4）及び V-2 を田中、IV-2（4）の中・近世遺物を鈴木、石製品を西井・矢田、その他を宮井が行った。
10. 本書の編集は、宮井が行った。
11. 本書に掲載した資料は、平成 21 年 4 月以降寄居町教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。  
梅沢太久夫・大澤伸啓（足利市教育委員会）・中島利治・水口由紀子・寄居町教育委員会（金子眞土・今関久夫・石塚三夫・小林 高・宮下響子）

## 凡 例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ}00'00''$ 、東経 $139^{\circ}50'00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。

各遺跡の基本座標値は下記のとおりである。

### 銭小田遺跡

C-3グリッド北西杭の座標は、 $X = 10690.000\text{m}$ 、 $Y = -53970.000\text{m}$ （北緯 $36^{\circ}05'41.46667''$ 、東経 $139^{\circ}14'01.32906''$ ）で、杭上の標高は $136.600\text{m}$ 。

### 伝田不動寺跡

E-3グリッド北西杭の座標は、 $X = 10760.000\text{m}$ 、 $Y = -54320.000\text{m}$ （北緯 $36^{\circ}05'43.66763''$ 、東経 $139^{\circ}13'48.31972''$ ）で、杭上の標高は $128.000\text{m}$ である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく $10\text{m} \times 10\text{m}$ の範囲を基本（1グリッド）としている。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、両者を組み合わせて呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…竪穴住居跡

S D…溝跡

S K…土壇

S E…井戸跡

S B…建物跡

T P…旧石器調査区

5. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面内に記した。

全測図 1/250

遺構図 1/60

遺物実測図・拓本 1/3

金属器 1/2

6. 遺物の残存率は、図示した部分についての凡その残存率を5%刻みで示した。
7. 遺物の焼成については、数値での表現が難しいため、良好・普通・不良の3段階で表す。
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
9. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図及び寄居町都市計画図（1/2,500・1/10,000）である。
10. 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要		IV 伝旧不動寺跡	
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 遺跡の概要	22
2. 発掘調査、報告書作成の経過	2	2. 遺構と遺物	30
3. 発掘調査、報告書作成の組織	3	(1) 平場	30
II 遺跡の立地と環境		(2) 溝跡	36
1. 地理的環境	4	(3) 井戸跡	38
2. 歴史的環境	5	(4) 建物跡	39
III 銭小田遺跡		(5) 出土遺物	42
1. 遺跡の概要	11	V 調査のまとめ	
2. 遺構と遺物	16	1. 銭小田遺跡	55
(1) 住居跡	16	2. 伝旧不動寺跡	56
(2) 土壌	16		
(3) 遺構外出土遺物	17		
3. 分析	21	写真図版	
		抄録	

## 挿 図 目 次

第1図	埼玉の地形	4	第19図	平場と尾根道	27
第2図	周辺の遺跡	7	第20図	土層断面図(1)	28
第3図	遺跡位置図	10	第21図	土層断面図(2)	29
銭小田遺跡					
第4図	調査範囲図	12	第22図	平場造成図	30
第5図	等高線図	13	第23図	平場石分布図(1)	31
第6図	全測図	14	第24図	平場石分布図(2)拡大(A)	32
第7図	土層断面図	15	第25図	平場石分布図(3)拡大(B)	33
第8図	第1号住居跡と出土遺物	16	第26図	第1号溝跡	35
第9図	土塹	17	第27図	第2号溝跡	36
第10図	土塹出土遺物	17	第28図	第3・4号溝跡	37
第11図	遺構外出土遺物(1)	18	第29図	第5号溝跡	38
第12図	遺構外出土遺物(2)	19	第30図	第1号井戸跡	40
第13図	遺構外出土遺物(3)	20	第31図	第2号井戸跡	41
第14図	分析資料出土位置図	21	第32図	遺物分布図	43
伝旧不動寺跡					
第15図	調査範囲図	23	第33図	出土遺物(1)	45
第16図	等高線図(調査前)	24	第34図	出土遺物(2)	48
第17図	全測図	25	第35図	出土遺物(3)	51
第18図	等高線図(掘削後)・基本土層図	26	第36図	出土遺物(4)	53
			第37図	福王寺と周辺の中世寺院	57
			第38図	福王寺周辺図	58

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	6	第2表	石器一覧表	21
第3表	黒曜石一覧表	21	第4表	不動寺関連寺院の変遷	59



# 写真図版目次

## 銭小田遺跡

- 図版 1 1 遺跡遠景 (空中写真・西より)  
2 遺跡遠景 (空中写真・西より)  
3 調査区遠景 (尾根上の遺跡)
- 図版 2 1 調査区全景  
2 第1号住居跡  
3 第1号土壇出土状況
- 図版 3 1 第2号土壇完掘状況  
2 第3号土壇完掘状況  
3 第4号土壇完掘状況
- 図版 4 1 黒曜石原石出土位置  
2 黒曜石原石出土状況  
3 旧石器調査区
- 図版 5 1 旧石器調査区 (T P 2) 土層断面  
2 試掘トレンチ  
3 調査風景
- 図版 6 1 第1号住居跡出土遺物  
2 土壇出土遺物  
3 遺構外出土遺物 (1)  
4 遺構外出土遺物 (2)
- 図版 7 1 遺構外出土土器 (1)  
2 遺構外出土土器 (2)

## 伝不動寺跡

- 図版 8 1 遺跡遠景 (空中写真・西より)  
2 遺跡遠景 (空中写真・北東より)  
3 調査区遠景 (調査前)
- 図版 9 1 調査区全景 (表土除去後)  
2 平場の調査 (南より)  
3 平場の調査 (北より)
- 図版 10 1 斜面部の土層  
2 第1号溝跡 (東より)  
3 第1号溝跡 (北より)
- 図版 11 1 第2号溝跡 (東より)  
2 第3号溝跡 (北より)  
3 第3・4号溝跡 (西より)
- 図版 12 1 第5号溝跡 (北より)  
2 第1号井戸跡 (上面)  
3 第1号井戸跡 (西より)
- 図版 13 1 第2号井戸跡 (東より)  
2 第2号井戸跡 (北より)  
3 第2号井戸跡 (小石集中)
- 図版 14 1 第2号井戸跡 (北より)  
2 井戸跡全景  
3 井戸跡全景 (完掘)
- 図版 15 1 第1号建物跡 (西より)  
2 第5号溝西側の礫群  
3 平場全景 (南より)
- 図版 16 1 遺跡北側の平場  
2 平場へ向かう道  
3 不動寺 (鐘樓門)
- 図版 17 1 不動寺 (応永8年銘のある塔)  
2 不動寺 (町指定板碑)  
3 富田大日堂

図版 18 1 福王寺北の小祠の石造物

2 福王寺墓地の石造物

3 観音堂裏の石造物

図版 19 1 鷲丸山中にあった石造物 (1)

2 鷲丸山中にあった石造物 (2)

3 鷲丸山中にあった石造物 (3)

図版 20 1 出土遺物 (かわらけ)

2 出土遺物 (かわらけ)

3 出土遺物 (卸皿)

4 出土遺物 (蓋)

5 出土遺物 (中・近世の陶磁器)

図版 21 1 出土遺物 (金属製品)

2 出土遺物 (板碑)

3 出土遺物 (板碑)

図版 22 1 出土遺物 (石製品)

2 出土遺物 (石製品)

3 出土遺物 (縄文土器)

# I 発掘調査の概要

## 1. 調査に至る経過

埼玉県教育委員会では、民間開発事業によりその保存に影響が及ぶ埋蔵文化財を適切に保護するため、県内市町村教育委員会に対し、専門職員の配置や発掘調査体制の整備などを積極的に指導してきた。しかしながら、大規模又は突発的な開発事業に係り緊急に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施が必要となり、地元教育委員会がこれに即応することが困難な場合については、当該市町村教育委員会からの要請にもとづき、県教育委員会として支援を行ってきたところである。

平成18年6月、本田技研工業株式会社から寄居町教育委員会教育長あて、寄居町大字富田地内におけるホンダ寄居新工場建設事業に伴う埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

町教育委員会では、事業計画内で周知の埋蔵文化財包蔵地を1箇所確認していたが、現況が山林であり、他に遺跡が無いことの確認ができていないため、分布調査を行う必要があると伝えた。

平成18年7月、埼玉県教育委員会の職員の同行を求め、現地踏査を実施した。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地以外に、尾根上の平坦面2箇所、尾根裾の緩斜面1箇所に未発見遺跡が存在する可能性のあることを確認した。

平成18年10月中旬から、尾根上で、遺跡の可能性のある2箇所について試掘調査を行い、1箇所から縄文前期の遺物を検出した。また、緩斜面については、地目が雑種地であり、森林法の制約が無いため、重機による確認調査を実施したが、発掘調査の対象となる遺構・遺物は検出されなかった。

試掘の結果をもとに2箇所が発掘調査が必要である旨回答し、それぞれ銭小田遺跡及び伝旧不動寺跡とした。

本田技研工業株式会社代表取締役より、平成19年8月2日付けで文化財保護法第93条の規定による発掘届が提出され、県教育委員会教育長は平成19年9月3日付け教生文第3-425号で「発掘調査（一部現状保存）」の指示を行った。

発掘調査の実施については、町教育委員会での対応が難しいことから、平成19年8月6日付け寄生発第354号で県教育委員会宛てに支援が要請され、本田技研工業株式会社を含む3者で協議が行われた。その結果、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなり、平成19年9月10日付けで4者による「ホンダ寄居新工場建設事業予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」が締結された。

発掘調査は平成19年10月1日から12月28日までの期間で実施された。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から県教育委員会あて、文化財保護法第92条の規定にもとづく届けが提出された。これに対する県教育委員会からの指示通知は以下のとおりである  
旧不動寺跡 (62-188)

平成19年10月9日付け教生文第2-40号  
銭小田遺跡 (62-245)

平成19年10月9日付け教生文第2-41号  
(寄居町教育委員会生涯学習課)

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

銭小田遺跡及び伝旧不動寺跡の発掘調査は、ホンダ寄居新工場建設に伴うもので、平成19年10月1日から平成19年12月28日まで実施した。調査面積は、銭小田遺跡が600㎡、伝旧不動寺跡が790㎡である。

9月下旬から事務手続き等の準備を開始し、9月28日から順次事務所設置工事等を実施した。なお、事務所はそれぞれの調査区付近に設置場所を用意できなかったため、寄居町富田2401-4に共有の事務所用地を借地し、両遺跡のユニットハウスを設置した。

両遺跡の発掘調査の経過は下記のとおりである。

#### ① 銭小田遺跡

10月2日から重機による表土除去作業を開始した。

遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業は10月5日に実施した。グリッドは10m方眼とし、調査区北西隅を基準に北から南にアルファベット（A B C・・・）、西から東に数字（1 2 3・・・）を付し、両者を組み合わせでA-1からD-4グリッドを設定した。

表土除去終了後、人力による遺構確認作業を行ったところ、竪穴住居跡1軒と土壇4基等が検出されたため、直ちに遺構の精査を開始し、順次土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。

遺構の調査終了後、10月31日に航空機による空中写真撮影を実施した。

すべての記録作業を終了し、同31日に事務所の一部の撤去及び事務手続き等を行い、すべての作業を完了した。

#### ② 伝旧不動寺跡

10月9日から重機による表土除去作業を開始した。

遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業は10月15日に実施した。グリッドは銭小田遺跡と同様に10m方眼としたが、グリッドの呼称は遺跡ごととし、調査区北西隅を基準にA-1からF-6グリッドを設定した。

表土除去終了後、人力による遺構確認作業を行ったところ、建物跡1棟の他溝跡5条・井戸跡2基等が検出されたため、直ちに遺構の精査を開始し、順次土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。

遺構の調査終了後、12月11日に航空機による空中写真撮影を実施した。

すべての記録作業を終了し、同31日までに事務所の一部の撤去及び事務手続き等を行い、すべての作業を完了した。

### (2) 整理・報告書の作成

銭小田遺跡及び伝旧不動寺跡の整理作業は、平成20年11月1日から平成21年1月30日まで実施した。

作業はまず、出土遺物の水洗・注記作業を行い、その後、それぞれの遺跡ごとに、遺構を中心に接合・復元作業を実施した。

遺構図面に関しては、各種実測図の整合性をとった上で作成した第二原図をデジタル化し、コンピュータ上でトレース作業を行った。

土器・石器等の遺物に関しては、それぞれ分類・抽出し、実測図および拓影図（破片など）を作成した。また、抽出した資料は写真撮影し、発掘調査時の遺構写真とともに写真図版の版下とした。

1月中旬から図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め、下旬には印刷業者を選定して入稿した。校正は3回行い、平成21年3月に報告書を刊行した。

### 3. 発掘調査・報告書作成の組織

#### 平成19年度（発掘調査）

理事長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調査部長	村 田 健 二
総務部		調査部副部長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	調査第二課長	細 田 勝
総務課長	松 盛 孝	調査第二課主査	山 本 禎
		同 上	新 屋 雅 明
		同 上	田 中 広 明

#### 平成20年度（報告書作成）

理事長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調査部長	村 田 健 二
総務部		調査部副部長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整理第一課長	宮 井 英 一
総務課長	松 盛 孝		

## II 遺跡の立地と環境

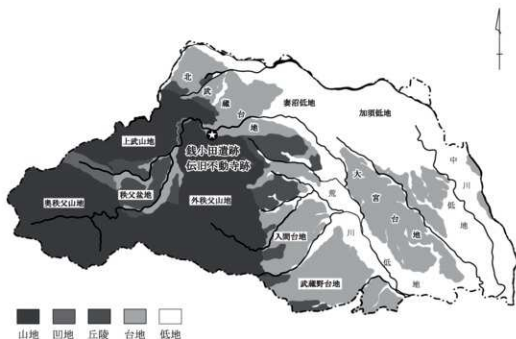
### 1. 地理的環境

遺跡が所在する埼玉県寄居町は、県北西部に位置し、末野窯跡群や国指定史跡の鉢形城をはじめ、数多くの遺跡や史跡が存在する地域である。

寄居町の地形は、西側の山地、東側の平野に大別することができる。西側に連なる山地は、荒川上流部の奥秩父山地、左岸の上武山地、右岸の外秩父山地に区分されている。奥秩父山地の甲武信岳(512m)に源流をもつ荒川が、町内のほぼ中央を貫流しており、波久礼を扇頂とする荒川扇状地を開析している。両岸には河岸段丘が発達しており、右岸と左岸で大きく二分して呼称されている。すなわち、左岸に広がる柳引台地と右岸に広がる江南台地である。ただし、町西部にあたる末野地区周辺の台地は、左岸に位置するが江南台地に比定されている。

柳引台地は、高位の柳換面と中位の御稜威ヶ原面、低位の寄居面に分類される。低位段丘面である寄居面は、関東ローム層に覆われない完新世段丘である。この寄居面は、さらに二分類することができ、寄居面の中で高位にあたる寄居面Ⅰと荒川至近に広がる低位の寄居面Ⅱに分けられている。台地上は比較的起伏が少なく谷の発達も顕著ではないが、台地上と上武山地との間には松久丘陵が発達している。

一方、右岸に広がる江南台地は、左岸よりも狭い範囲で寄居面が形成されており、上位には下末吉面に対比される段丘面が広がる。また、町の南東部では、台地と外秩父台地との間に比企丘陵が発達している。柳引台地と比較すると谷の発達が著しく、荒川に注ぐ小規模河川によって形成された谷が複雑な地形を作り出している。本報告遺跡は、鷲丸山(212m)から発達した尾根に位置するが谷津地区の名が表すとおり、山麓は谷が開析された谷戸状の地形を示す。



第1図 埼玉県の地形

## 2. 歴史的環境

寄居町内では、旧石器時代から人々の生活の痕跡がみられる。荒川右岸の赤浜牛無具利遺跡や稲荷窪遺跡からは、ナイフ形石器、搔器などが出土しており、特に赤浜牛無具利遺跡では、石器集中地点に加えて炭化物の集中地点が報告されている。また、同じ江南台地上で、荒川左岸に位置する末野遺跡（C～F区）では局部磨製石斧、ナイフ形石器、縦長剥片等が出土しており、県内でも最古級の遺物が出土している。

縄文時代の開始期である草創期に該当する遺跡は、現在までのところ発見の報告はない。人々が残した痕跡を確認できるのは、早期に入ってからのことである。早期前半は、僅かに松久丘陵先端に位置している堀込遺跡などで該期の遺物が散見されるに過ぎない。早期後半になると銭小田遺跡（1）、上の原遺跡（18）、愛宕山北遺跡（22）、ゴシン遺跡（30）など、各地で遺物が散見されるようになるが、本格的な集落の展開は前期を待たなければならない。

前期の遺跡としては、下南原遺跡、前耕地遺跡、上郷西遺跡（29）羽毛田遺跡（51）、南大塚遺跡、薬師台遺跡（45）、甘粕原遺跡（48）、樋ノ下遺跡（57）、中小前田1遺跡（60）、塚屋遺跡（61）などがあげられる。前耕地遺跡は、花積下層式土器を出土した前期前半段階の遺跡である。銭小田遺跡でも僅かにこの時期の土器片が出土している。この時期までは早期に引き続き遺跡数は少ないが、その後、関山～黒浜式期に至って遺跡数の増加が顕著に認められ、関山～黒浜式期の住居跡が70軒あまり検出された南大塚遺跡のような大規模な集落跡も確認されるようになる。また、関山式期の遺跡である羽毛田遺跡のように、低位段丘である寄居面にも集落遺跡が出現する。

続く諸磯式期においても諸磯a～b式の段階では集落の大規模化が継続するようである。この時期の遺跡としては、25軒の住居跡が調査された塚

屋遺跡などがある。諸磯c式期に入ると、樋ノ下遺跡、上郷西遺跡などで住居跡が検出されているものの規模は取束の傾向にあり、再び拡大が認められるのは中期に入ってからのことである。

中期になると遺跡数は爆発的な増加をみせる。特に加曾利E式期でその傾向が顕著であり、前段階の勝坂式期の集落と比較しても格段に増加していることがわかる。この遺跡の増加と大規模化の傾向は、中期後半から次第に衰退し、後期の堀ノ内式期以降、極端に遺跡は減少するようである。

遺跡としては、甘粕原遺跡、八幡台遺跡（24）、ゴシン遺跡、露梨子遺跡（31）、むじな塚遺跡（35）、氷川台遺跡（46）中小前田2遺跡（62）など多数の遺跡があげられる。山地縁辺部から台地部に至る各所に集落が展開していたようであるが、むじな塚遺跡や露梨子遺跡などの大規模な集落跡は舌状台地が発達した環境に位置する傾向がみられる。大規模な集落が展開する一方で、比較的小規模な集落も各地域に認められる。

後期になると、堀ノ内式期に該当する集落が散見されるが中期ほどの勢いはなく、この時期を境にして、遺跡の存在そのものが稀薄となってしまう。後期の遺跡は、中小前田2遺跡、樋ノ下遺跡、愛宕山北遺跡（22）、大塚遺跡（27）、町田耕地遺跡（50）、東遺跡（47）などがあげられる。

このうち、樋ノ下遺跡からは柄杓形の敷石住居を含む13軒の住居跡が検出されており、該期の集落跡としては比較的大きな集落といえる。また、樋ノ下遺跡をはじめ、東遺跡や露梨子遺跡でも敷石住居が検出されており、他の地域に比べると検出例が多いことが特色としてあげられる。荒川の中流域にあたるこの地域において、敷石として使う石材に恵まれていたことも要因の一つであろう。

後期中葉からは著しく遺跡の数は減少し、後期後半段階では樋ノ下遺跡で曾谷式土器を出土した土壌が確認されている程度である。

晩期の遺跡は現時点で発見の報告はない。このような状態は、弥生時代中期に松久丘陵先端に成立する用土・平遺跡などが出現するまで続く。

用土・平遺跡からは、住居跡10軒と倉庫状遺構2棟が検出されており、中部高地系土器と磨製石鏃、有角石斧などの石器が出土している。弥生時代の遺跡はこの周辺で散見される程度である。

古墳時代になると、長期にわたって閑散としていた荒川右岸の地域で再び人々が活発に活動し始める。また、未開発地が多かった寄居面への進出が積極的に行われるのもこの頃からである。

前期の集落跡は荒川右岸の富田地区や赤浜地区で集中して発見されており、現在までのところ町西部では確認されていない。むじな塚遺跡、東遺跡、東伴場地遺跡(12)、中芝遺跡(14)、伊勢原遺跡(33)、上寺西遺跡(38)、鉢形東遺跡(44)などが分布し、東伴場地遺跡、中芝遺跡、上寺西遺跡は五領式期から和泉式期まで継続する集落であることが確認されている。

また、伊勢原遺跡からは吉ヶ谷式土器をもつ住居跡に加え、16軒の住居跡が検出されている。伊勢原遺跡で出土した土器群は概ね南関東系の土器

第1表 周辺の遺跡一覧表

1	銭小田遺跡	19	平林2遺跡	37	北側上町遺跡	55	橋屋遺跡
2	伝田不動寺跡	20	愛宕山東遺跡	38	上寺西遺跡	56	立ヶ瀬古墳群
3	富田堀の内	21	入田1遺跡	39	昌国寺遺跡	57	樋ノ下遺跡
4	西岸谷遺跡	22	愛宕山北遺跡	40	常楽寺南遺跡	58	岩崎遺跡
5	西岸谷2遺跡	23	入田2遺跡	41	小園古墳群	59	北塚屋遺跡
6	粕沢2遺跡	24	八幡台遺跡	42	上郷古墳群	60	中小前田1遺跡
7	粕沢1遺跡	25	大谷久保遺跡	43	日向山遺跡	61	塚屋・北塚屋遺跡
8	根岸入沼跡	26	上ノ前遺跡	44	鉢形東遺跡・東B地点遺跡	62	中小前田2遺跡
9	不動寺館跡	27	大塚遺跡	45	薬師台遺跡	63	桜沢堀の内遺跡
10	島田氏屋敷跡	28	上郷A遺跡	46	水川台遺跡	64	桜沢窯跡
11	塚越遺跡	29	上郷西遺跡	47	東遺跡	65	桜沢小西遺跡
12	東伴場地遺跡	30	ゴシン遺跡	48	甘粕原遺跡	66	桜沢上ノ原遺跡
13	宮の前遺跡	31	露梨子遺跡	49	大河内金兵衛陣屋跡	67	桜沢古墳群
14	中芝遺跡	32	東原遺跡	50	町田耕地遺跡	68	大塚山遺跡
15	旧鉢形中跡遺跡	33	伊勢原遺跡	51	羽毛田遺跡	69	南飯塚遺跡
16	三ヶ山窯跡	34	南側上町2遺跡	52	黒田古墳群	70	飯塚氏館
17	平林遺跡	35	むじな塚遺跡	53	小前田氏館	71	東大塚遺跡
18	上の原遺跡	36	伊勢原古墳群	54	小前田古墳群	72	東大塚古墳群

で構成されているが、やや西に位置する鉢形東遺跡からはS字状口縁台付甕も出土している。

一方、左岸では引き続き用土地区に遺跡が分布しており、藤田南遺跡などは五領式期から和泉式期にかけての集落として知られるところである。

古墳は荒川の両岸に多数確認されるが、古墳時代後期以降に築造されたもので、前期にまで遡る古墳は確認されていない。

後期になると、荒川左岸では小前田古墳群、桜沢古墳群、藤田古墳群、木ノ根沢古墳群、壁ヶ谷戸古墳群、右岸では上郷古墳群、赤浜古墳群、伊勢原古墳群などが形成される。これらの古墳群は、小型の円墳によって構成されており、築造時期は6世紀前半から7世紀と考えられている。

集落跡は東伴場地遺跡や露梨子遺跡、むじな塚遺跡など、前段階からの遺跡立地を踏襲しながらも末野地区の城見上遺跡や末野遺跡など、これまで未開発であった地域への居住が始まる。特に、6世紀末から7世紀前半頃には末野地区で須恵器の生産が始まり、人々が山麓に進出していく要因の一つになったことは想像に難くない。

古墳の築造が終わりを迎える頃になると、鐘撞





第2図 周辺の遺跡

堂山の尾根上に馬騎の内麿寺が建立される。礎石立ちの建物跡を含む16ヶ所の平場が知られており、出土瓦には須恵器製作の技術である平行叩き具痕、当て具痕がみられる。そのため、古くから末野窯跡の操業と直接関係する寺院として須恵器工人との関係が指摘されている。前出の末野窯跡は大規模な窯跡群へと成長し、8世紀後半から9世紀代に操業のピークを迎える。窯跡も山麓から平地へと進出し、10世紀には桜沢窯跡(64)や折原窯跡、長瀬町などに分散する傾向が認められる。

さて、寄居町は古代の行政区分において荒川の左岸が榛沢郡、右岸が男衾郡に属していたと考えられており、末野窯跡群や馬騎の内麿寺は、榛沢郡に属していたことになる。榛沢郡では、すでに深谷市(旧岡部町)の中宿遺跡で正倉跡が発見されており、至近距離には郡家の寺院とも考えられる岡麿寺も存在している。

一方、右岸の男衾郡は、男衾の地名が残る東伴場地遺跡周辺や深谷市(旧川本町)の百済木遺跡周辺などを郡家の比定地とする説もあるが、現段階では推定の域をでない。東伴場地遺跡からは、瓦や基壇状遺構も検出されており、寺院が存在した可能性は高く、郡の寺があったとも考えられる。

百済木遺跡は、有力者の居館と考える説が有力で、南には男衾郡大領であった壬生吉士福正との関係が指摘される寺内麿寺が存在する。こうした状況から、いずれかの遺跡周辺で将来的に郡家跡が発見される可能性は十分に考えられる。

奈良・平安時代の遺跡は、先にあげた古墳時代後期の集落が継続する傾向が強い。新たな遺跡は、平安時代に入ってから小規模な集落跡が多く、折原石道遺跡、南大塚遺跡、氷川台遺跡、前耕地遺跡、愛宕山東遺跡(20)などがあげられる。

平安時代後期になると、荘園を経済基盤とした武装集団が成長し、やがて武士団を形成するようになる。武蔵国を拠点とした武蔵武士は、後の石橋山における源頼朝の挙兵に従い、鎌倉幕府の成

立に大きな役割を果たしていくのである。ここで活躍したのが、秩父氏の末裔である畠山氏や河越氏のような豪族の領主や武蔵七党と呼ばれる同属的結合関係で結ばれた小中規模の武士団である。

さて、寄居町域には畠山氏のような豪族の領主の存在は確認できないが、武蔵七党の猪俣党に属する尾園・男衾・藤田・山崎・桜沢・南飯塚・无動寺・金尾氏や丹党に属した織原・葉栗氏などが町内の各地に割拠していたと考えられている。彼らが名乗った自らの本貫地名は、桜沢・藤田・男衾、折原(織原)、波久礼(葉栗)など、現在の地名と重なる。拠点には堀や土塁などの防御施設を備えた館を構えており、各地区に館跡の推定地が存在する。いずれも不確定ながら、藤田氏館跡、桜沢氏の桜沢堀の内(63)、男衾氏の富田堀の内(3)、无動寺氏の无動寺館跡(9)などがあり、桜沢堀の内には土塁と堀の一部が残されている。また、隣接する深谷市(旧花園町)には、小前田氏館(53)、飯塚氏館(70)の推定地が存在する。

伝无動寺跡の所在する富田地区は、男衾氏または无動寺氏が領有していたと考えられ、周辺には「富田型頂部」と呼ばれる特徴的な技法をもつ初期板碑が点在している。特に、大日堂と称される堂に安置されている板碑は、寛元元年(1243)の銘が刻まれる町内最古の板碑で、県内でも類例がない胎蔵界曼荼羅の中台八葉院を表している。現无動寺境内にも康元2年(1257)の紀年銘をもつ阿弥陀一尊種字が刻まれた板碑が存在している。これらの板碑は、富田周辺の限られた範囲で4例が確認されるだけである。造立者は、男衾氏もしくは无動寺氏の存在が窺われるところであり、武士団の勢力範囲を探るための貴重な資料でもある。また、最古の板碑に胎蔵界曼荼羅という密教的色彩の強いモチーフを採用していることから、真言宗寺院である无動寺が造立に関与していた可能性も考えられよう。このように、平安後期から鎌倉

時代にかけての当地域は、遺跡として痕跡を捉えられるところは多くないものの、中小規模の武士団を主役として活発な動きがあった。

赤浜地区には鎌倉街道上道が通っていたと伝わっており、実際に赤浜天神沢遺跡や普光寺東遺跡からは、鎌倉街道上道跡と推定される掘割状遺構や塚及び塚盛土の下から土壌等が調査されている。13世紀後半から15世紀前半の遺物が出土しており、普光寺付近からは50基以上の板碑群が出土したことで知られている。

さらに塚田周辺は、室町時代には「塚田千軒」とも呼ばれる宿が栄えていた。同地区の三嶋神社に伝わる応永2年(1395)銘の鰐口に「塚田宿」の銘がみられる。また、千葉県鴨川市(旧安房郡天津小湊町)の清澄寺にある明徳3年(1392)銘の梵鐘には「大工武州塚田 道輝」とあり、鋳物師集団の存在を示す貴重な資料として注目される。塚田鋳物師の詳細については不明であるが、三嶋神社裏山には、鉄滓や炉壁が散布しており、この地が「塚田鋳物師」本貫地であったと推定される。

さて、元弘の乱(1331)を経て、室町幕府が成立すると、貞和5年(1349)足利尊氏は次男の基氏を鎌倉府の長官として派遣した。その補佐役として従ったのが、後に関東管領職を世襲する上杉氏である。その後、鎌倉府の内紛から「管領」上杉氏と「公方」足利氏を頂点とする勢力が激突するようになる。康正元年(1455)には、今川範忠によって鎌倉府が制圧され、足利成氏は古河に御座所を定めて古河公方と呼ばれるようになるが、その後も古河公方と両上杉氏は激しい争いを続ける。そうした中、文明8年(1476)に関東管領補佐役である執事職をめぐる、山内上杉家の長尾景春が反旗を翻し鉢形城に入る。この時期に長尾景春は鉢形城の整備を行い、その礎を築く。鉢形城は、当時すでに存在していたが、本格的な城郭として整備されたのはこの頃と考えられている。

文明10年(1478)、景春は扇谷上杉氏の家宰太

田道灌によって鉢形城を追放され、代わって山内上杉顕定が鉢形城に入城する。両上杉氏の争いが激化してくると、そこに乗じて相模を制圧した北条氏が武蔵国に進出始める。大永4年(1524)の高輪原の戦、天文6年(1537)の三ツ木原の戦に勝利し、江戸城と河越城を奪取した北条氏は、河越合戦を経て、秩父盆地まで勢力を広げる。

ところで、室町時代から戦国期にかけての寄居町は猪俣党藤田氏の末裔が依然勢力を誇っていた。当初は扇谷上杉氏に従っていたが、北条氏による支配が進むと藤田康邦は北条氏康の四男である氏邦を養子に迎える。越後の長尾景虎、甲斐の武田晴信といった戦国の群雄の動きに対し、氏邦は天神山城から鉢形城に移り、支城とされる日尾城・高松城・要害山城・花園城・用土城・円良田城などの本格的な整備を進めたと考えられている。

要害山城は、三つ廓の4つの平場が調査されており、武田氏の進入に備えた「早期警戒型物見台」としての機能を想定する見解もある。花園城については未調査であるため詳細は不明である。折原堀の内遺跡、末野元宿遺跡、大正寺遺跡などでは中世の集落跡が確認されており、北条氏に仕えた武士が居住していた可能性も考えられている。

天正17年(1589)真田家の名胡桃城を猪俣邦憲が奪取するという名胡桃事件の発生に情勢は一変し、豊臣秀吉による小田原攻めが始まる。鉢形城は前田利家らに包圍され籠城戦を展開するが、氏邦は開城を決断することになる。北条家の本拠地であった小田原城も落ち、五代に亘り関東に君臨した北条氏もついに滅亡し、鉢形城を含め、各支城は徳川家康によってすべて廃城とされた。

鉢形城主の氏邦は、前田利家の預かりとなって加賀へ赴き、慶長2年(1597)に金沢で没するが、没後は菩提寺である寄居町の正龍寺に葬られ、正龍寺の墓地には、義父である藤田康邦夫妻の墓に並んで氏邦夫妻の宝篋印塔が現存している。



第3図 遺跡位置図

### III 銭小田遺跡

#### 1. 遺跡の概要

銭小田遺跡は、大里郡寄居町大字富田字銭小田に所在し、東武東上線男麦駅の南方約1,500mに位置する。

発掘調査は、本田技研工業株式会社の寄居新工場の建設工事に伴うもので、平成19年10月から2ヶ月間実施された。

新工場の建設が予定されている富田地区は寄居町の東南部に位置し、荒川右岸の低地部から外秩父山地の東縁にまでかかる広い地域である。新工場の建設には、その山裾を含む約98万㎡という広大な範囲が予定されており、試掘調査の結果、2ヶ所の尾根上に遺跡が確認された。本遺跡は、それらのうち東側の尾根（富田字銭小田）の先端部近くに所在する。

遺跡の載る尾根は、両側に深く発達した細長い谷が入り込んでおり、西側の山地から高度を減しながら150m前後の幅で北北東方向に延びている。遺跡は、その先端近くの比較的平坦な部分に位置しているが、東西方向は急峻な斜面となっており、水田面との比高差は20mほどである。

遺跡自体は、尾根上の平坦部に合わせてほぼ楕円形に広がるものと思われるが、今回調査対象となったのはその南半約600㎡の部分で、北側は現状保存区域として残されることとなった。

調査区は、東西約30m、南北約25mの半円形を呈し、標高135m～136.5mほどの南に下る緩やかな斜面で、発掘調査前は、松・杉などの樹木の生い茂る林であった。

発掘調査に当たっては、まず樹木を伐採し、重機によって遺物が出土する面まで表土（落葉・腐葉土など）を除去した。その後人力による抜根処理と精査を行ったところ、黒曜石原石及び縄文土器片が出土したが、遺構は明瞭に検出されなかったため、更に重機による削平を行った。

発見された遺構は、竪穴住居跡1軒と土壇4基である。

竪穴住居跡は、調査区北東の壁際で検出された。長辺3mほどの楕円形の掘り込みで、今回は住居の一部しか調査できなかったが、調査区域外の部分については、試掘調査時にも確認されている。また、覆土から出土した土器片から縄文時代中期の遺構と考えられる。

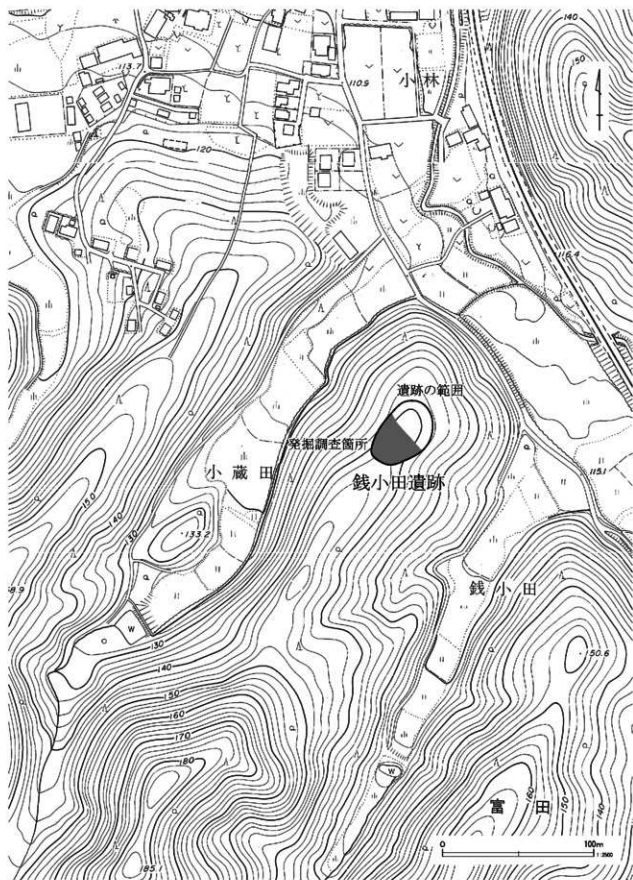
4基検出された土壇は、何れも不整形円形の浅い掘り込みであるが、第1号土壇からは、住居跡と同様に縄文時代中期の土器片が出土している。また、第4号土壇は住居跡を壊して造られていた。

今回の調査では、およそコンテナ1箱分の遺物が出土したが、何れも縄文時代に属するものである。遺構外の遺物としては、住居跡と同様縄文時代中期の加曾利E式土器のほか、早期の野島式、前期の諸磯式などがあり、また石器も打製石斧・石鎌などが出土している。特に注目されるのは、調査区北西部から出土した黒曜石原石である。1点のみの出土であるが、長野県和田峠産の原石と思われる、未使用の石器石材が遺されている稀な例である。

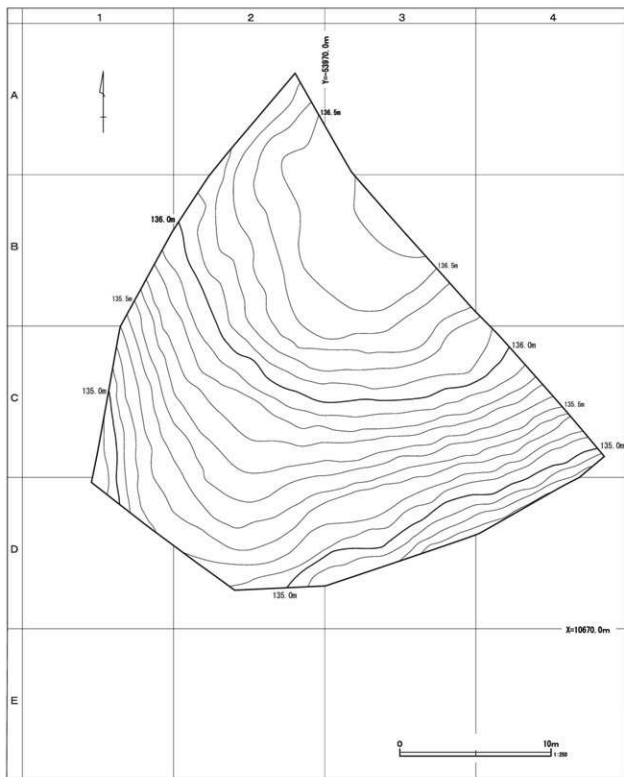
なお、上記の石材が出土したことから、数ヶ所の旧石器調査区を設けて調査を行ったが、旧石器時代遺物の検出には至らなかった。

#### 地形と基本土層（第7図）

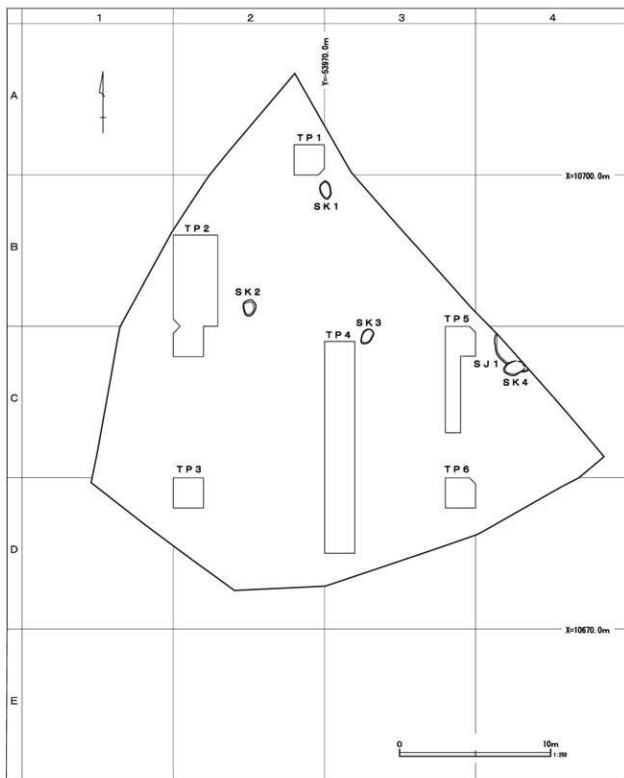
旧石器調査区（T P 1～T P 6）での土層を示した。前述したように、本遺跡は、幅150mほどの尾根の先端近くの平坦地にあるため、調査区では南に緩やかに下る地形となっている。尾根上のため、表土の堆積は少なく、岩盤層までは最も厚い北側でも1m程度である。堆積土は締まりのよい赤褐色土で、北側では上部に軟質の層が認められた。



第4図 調査範囲図

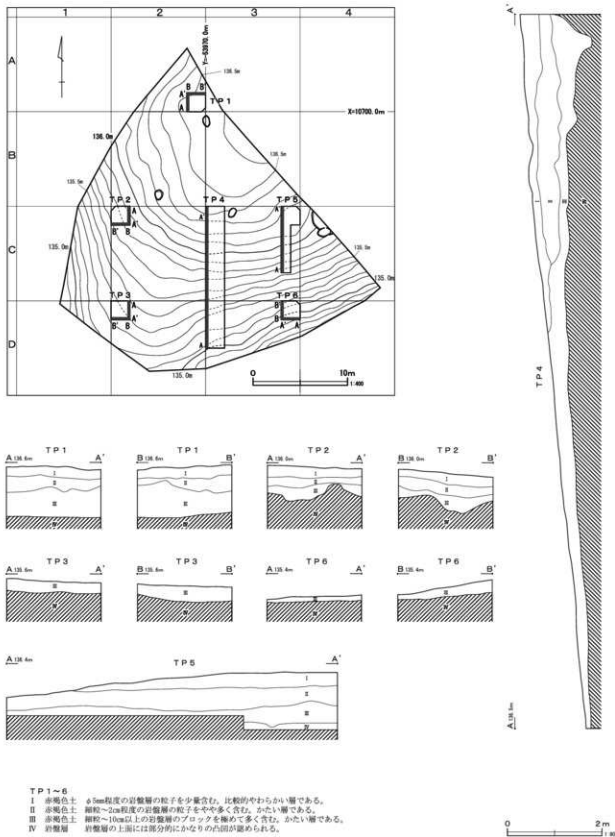


第5図 等高線図



第6図 全測図





第7図 土層断面図

## 2. 遺構と遺物

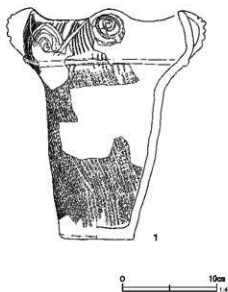
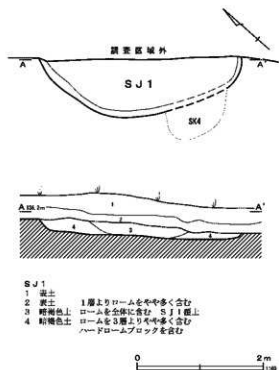
### (1) 住居跡

#### 第1号住居跡 (第8図)

C-4グリッドに位置する。遺跡の立地する丘陵の南東側から検出された。住居跡のほとんどが調査区域外であったため、南西側の一部が調査されたものである。住居跡の南側には第4号土壌が重複している。残存部や遺物の時期から、平面形は円形であると考えられる。調査された住居跡は、長径3.18m、短径0.90m、深さ0.31mである。炉跡、柱穴は検出されなかった。

第8図1は、本遺構から出土した深鉢形土器で

ある。口縁部は4単位の波状口縁で、波頂部下には渦巻きを持つ中空の突起を貼付している。突起間には沈線を弧状に施文し、その内側に沈線を重弧状に施文している。口縁部と胴部は1本の隆帯で区画する。地文は口縁部と胴部と異なって施文しており、口縁部には単沈線状の条線を施文している。胴部には燃糸文Lを斜め方向に施文している。推定される口径は15.5cmである。底径は8cmである。縄文時代中期後葉の加曾利EⅠ式に比定される。



第8図 第1号住居跡と出土遺物

### (2) 土壌

#### 第1号土壌 (第9・10図)

B-2・3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.20m、短径0.70m、深さ0.17mである。

第10図1～3は検出された遺物である。1・2は出土した土器で、1は条痕文系土器の胴部の小破片で、内外面に条痕が施文されている。2は前期後葉の諸磯a式土器の胴部の破片で、地文のみ

が施文されている。地文は単節RLの縄文で、横方向に施文している。3は出土した石器で、刃部に最大幅を持ついわゆる楕形打製石斧で、右側縁の一部と基部の先端が欠損している。側縁はやや外湾しており、刃部は偏刃である。

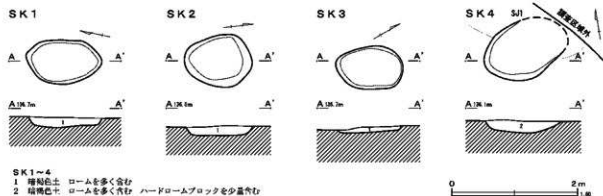
出土遺物の時期は、それぞれ異なるため、土壌の詳細な時期は不明である。

### 第2号土壇 (第9図)

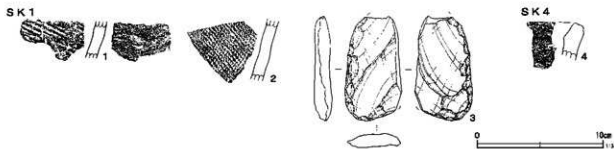
B-2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.05m、短径0.81m、深さ0.16mである。遺物は検出されなかった。

### 第3号土壇 (第9図)

C-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.02m、短径0.67m、深さ0.12mである。遺物は検出されなかった。



第9図 土壇



第10図 土壇出土遺物

### (3) 遺構外出土遺物

#### 出土土器

#### 第I群土器 (第11図1~18)

早期の土器群を一括する。

1・2は早期前葉の燃糸文系土器で、胴部の破片である。器面には縦走するように単節RLの縄文を施文している。

3~18は繊維を含む早期後半の条痕文系土器である。3・4は野島式と考えられる胴上半部の破片で、沈線によって文様を施文し、その区画内に

### 第4号土壇 (第9・10図)

C-4グリッドに位置する。土壇の北半分が第1号住居跡と重複している。平面形は楕円形で、推定される長径1.38m、短径0.87m、深さ0.20mである。

第10図4は検出された土器である。縄文時代中期中葉の深鉢形土器で、無文の口縁部である。土器は小破片のため、流れ込みとも考えられ土壇の時期との関連は不明である。

斜め方向に集合沈線を充填施文している。5~11は鶺鴒島台式と考えられる。胴上半の文様部分の破片で、5・6、11・12は細隆起線で文様を施し、細隆起線の上に刺突文や円形刺突文などが施文される。区画内には部分的に集合沈線が充填施文される。7~10は沈線で文様を施文し、沈線上には刺突文や円形刺突文が施文される。区画内には部分的に充填施文が施され、7・8は集合沈線が、9・10には連続刺突文が施されている。12~18は

内外面に条痕整形を施す胴部破片である。

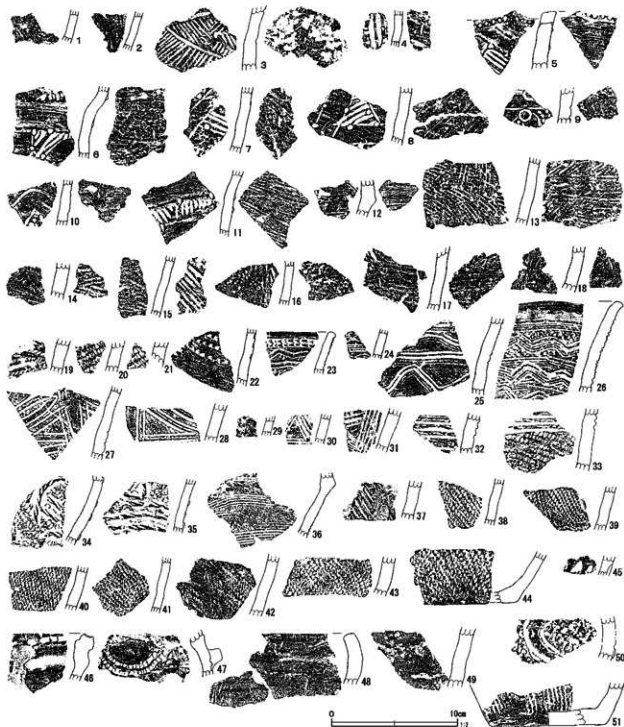
第Ⅱ群土器 (第11図19~45)

前期の土器群を一括する。

19~21は繊維を含む前期初頭の花積下層式である。19は口縁の文様部分の破片で、燃糸文Rの側面圧痕を施文している。20・21は胴部の小破片で、

単節LRの縄文を横方向に施文している。

22~44は、前期後葉の諸磯式である。22~33は諸磯a式である。口縁部から頸部にかけての破片で、半截竹管などで沈線文を施す。22、29は半截竹管による連続刺突文を並行して施文している。23~26は平行沈線文間に波状文を施文するもので



第11図 遺構外出土遺物 (1)

ある。23は口縁部の破片で、口唇部直下には2列の刺突文を巡らしている。27・28～30・31は沈線文を三角形に施文するものである。32・33は平行沈線文が施されている。25、30・31は文横内の地文を磨り消すもので、他は横方向に施文する単節RLの縄文を地文としている。34～36は諸磯b式で、34・35は刻みを施す浮線文を貼付する。地文は単節RLの縄文を横方向に施文している。36は口縁部下の屈曲部分の破片で、集合平行沈線を施文する。地文は0段多条LRの縄文を横方向に施文している。37は諸磯c式の胴部破片で、集合沈線文を斜めに施文している。38～44は地文のみが残存する胴部から底部の破片で、諸磯a式であると考えられる。地文は単節RLの縄文を横方向に施文している。

45は前期終末の十三菩提式である。器面には三角形の印刻を施文している。

### 第Ⅲ群土器

中期の土器群を一括する。

46～49は中期中葉の阿玉台式系の土器である。46・47は口縁文様部分で、46は面を持つ口唇部に結節沈線を施文している。47は2列の結節沈線を施文している。48は浅鉢の口縁部の破片である。

50・51は中期後葉の加曾利EⅠ式土器で、50は口縁文様部分の破片で、隆帯によって渦巻き文などを施文している。51は底部の破片で、地文は燃糸文Lを縦方向に施文している。

### 出土石器

#### 石鏃 (第12図52)

52は無茎の石鏃である。基部の破損後に、再加工を施して、形状を整えている。

#### 打製石斧 (第13図54)

早期の土器群にともなういわゆる礫石斧で、裏面は自然面がそのまま残存している。

#### 搔器 (第13図55～57)

横長に使用した剥片の端部を粗く加工するもの

である。55は基部に、56は表面、57は裏面に自然面が残存している。刃部の調整は、55・57においては片面のみ、56は両面に施している。

#### 磨石 (第13図58～60)

58は器面全体を磨面として使用するもので、表面中央や裏面の端部には敲打痕が認められる。60は表裏面を磨面として使用するもので、側縁の一部には敲打痕が認められる。59は棒状の素材を使用したもので、全面を磨面として使用している。また、下端部に敲打痕が残存することから、敲石としても使用していたと考えられる。

#### 石皿 (第13図61)

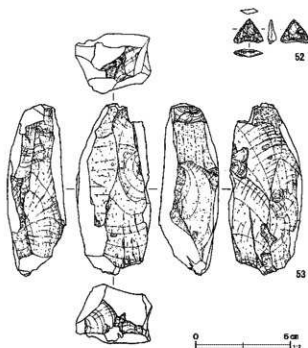
扁平な素材を使用したもので、表裏面を使用している。側縁には敲打痕が認められる。

#### 砥石 (第13図62)

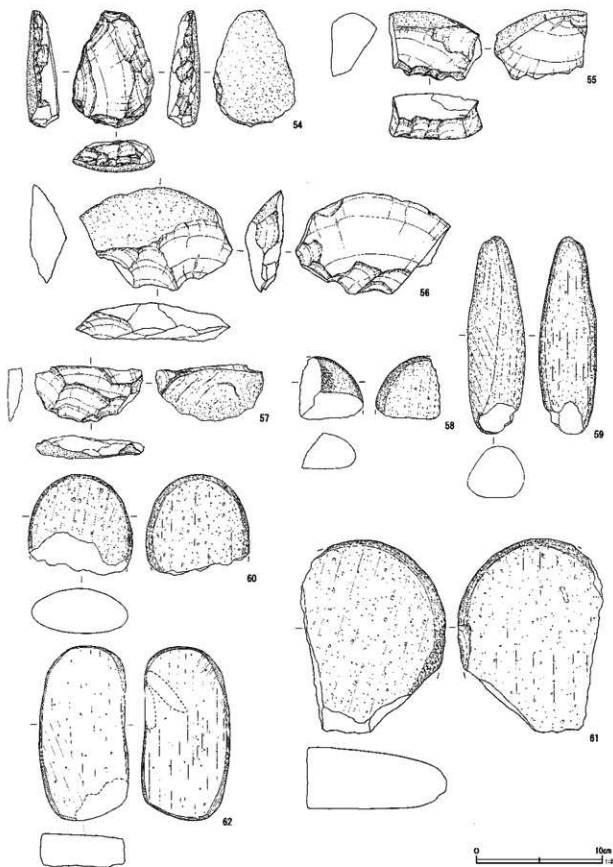
方形に加工されるもので、表裏面と側面、上下面が平らに整形されている。

#### 原石 (第12図53)

長さ9.1cmの黒曜石の大型原石である。角柱状で表面は風化している



第12図 遺構外出土遺物(2)



第13图 濠沟外出土遗物(3)

第2表 石器一覧表

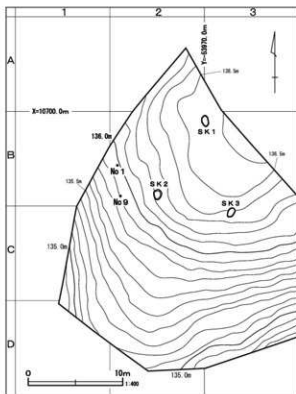
図版	番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
10	3	SK1	打製石斧	ホルンフェルス	8.4	4.5	1.4	69.2	
12	52	B-2	石鏃	黒曜石	1.3	1.4	0.4	0.5	産地推定分析番号9
12	53	B-2	原石	黒曜石	9.1	3.9	3.1	114.9	産地推定分析番号1
13	54	B-2	打製石斧	ホルンフェルス	9.3	6.4	2.6	174.7	
13	55	2トレンチ	搔器	ホルンフェルス	5.5	7.3	3.7	180.8	
13	56	C-3	搔器	ホルンフェルス	8.1	12.1	3.0	275.5	
13	57	C-3	搔器	ホルンフェルス	4.5	8.5	1.8	66.7	
13	58	14トレンチ	磨石	砂岩	5.0	5.0	3.3	76.6	
13	59	B-2	磨石	緑色岩	15.7	4.6	4.2	421.9	
13	60	C-3	磨石	安山岩	8.0	8.2	3.9	305.6	
13	61	C-3	石皿	安山岩	15.4	11.4	5.0	1128.8	
13	62	12トレンチ	砥石	砂岩	13.8	7.0	3.0	370.2	

### 3. 分析

調査区から検出された黒曜石製の石器について、蛍光X線分析による産地推定を行った。

調査区から出土した黒曜石の石器のうち原石は、長さ9.1cmを測る大型のもので、縄文時代所産の貴重な検出例となっている。原石については発掘調査時に産地推定を行っている。(大屋他2008)。ここでは調査区内出土の、黒曜石の石器8点を対象として産地推定を行い、分析済みの原石の結果と合わせて黒曜石一覧表に記した。

黒曜石製石器の出土位置は、分析番号1の原石(第12図52)と9の石鏃(第12図53)のみが確定できた(第14図)。他の7点については、グリッド出土は3ヶ所に分かれ、一括も3点あることから、分布にまとまりはなく散漫に検出されている。周辺から検出された土器も時期にまとまりはなく、石器の詳細な時期は特定できなかった。



第14図 分析資料出土位置図

第3表 黒曜石一覧表

分析番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	誤差の目安	推定した産地	備考
1	B-2	原石	9.1	3.9	3.1	114.9	$m-m \pm 2\sigma$	男女倉群	第12図52
2	C-3	剥片	2.7	1.6	0.8	3.7	$m-m \pm 2\sigma$	男女倉群	
3	C-4	剥片	1.8	2.7	0.7	2.3	$m-m \pm 3\sigma$	男女倉群	
4	C-3	剥片	1.6	2.0	0.9	1.5	$m-m \pm 5\sigma$	和田峠群	
5	B-2	剥片	2.4	0.9	0.5	0.6		不明	
6	一括	剥片	1.2	1.3	0.3	0.3		不明	
7	一括	剥片	1.3	0.8	0.5	0.4		不明	
8	一括	剥片	0.9	0.7	0.2	0.1		不明	
9	B-2	石鏃	1.3	1.4	0.4	0.5	$m-m \pm 5\sigma$	男女倉群	第12図53

## IV 伝旧不動寺跡

### 1 遺跡の概要

本遺跡では、平場跡の調査と東西の斜面部分の調査が中心となるが、調査前には松・杉・桜・竹などの樹木が生い茂り、地形の現況も明瞭ではなかった。そこで、まずそれらの伐採と現況地形の測量を行い、寄居町による試掘トレンチを確認した後調査を実施した。

#### ①現況地形の調査

現況の地形測量を平板測量によって行い、100分の1地形図を作製した。平場の東側には、かつてオリエンタル化学工業寄居工場に伴う爆裂障壁が作られており、現在では大きな窪地となっている。

測量の結果、平場は東西幅約20m、南北約40m、標高127.5m～128.8mで、東側の資材搬入路からの標高差は10m～12mほどであることが判明した。また、平場の造成は、鷲丸山から北に細長くのびる丘陵尾根(稜線)のやや東側から「箕」の形に削り込み、東側の谷部に土砂を落とす盛土成形によるものである。

鷲丸山から樹枝状に延びた馬の背状の丘陵は、結晶片岩系の岩盤の上にローム層が厚く堆積していた。切り土による斜面部は、黄褐色のやわらかいローム層が露出し、斜面部から崩落した黄褐色土が、斜面下に堆積していることが予測された。また、斜面部の一部には、基盤の岩盤が露出している部分も観察された。

なお、資材搬入路としたものは、かつては谷津の集落からオリエンタル化学工業の工場に向かう路であった。

#### ②試掘跡の再確認

現況の測量調査のあと、寄居町教育委員会が行った平成18年11月の試掘調査で掘削された試掘坑の埋め土を除去した。埋没土層の堆積状態を確認することと、平場北側で出土した「礎石」群を再

検出するためである。

試掘坑の土層観察に基づき、斜面部と平場の表面に堆積した腐植土(主に竹の根)をバックホーで除去し、また、松や桜・杉などの大形樹木については、遺構等への影響を考慮して重機による抜根を行わず、人力で鋸や鉋、筭鎌等を用いて除去した。

#### ③発掘調査

発掘調査は、まず、平場および西側の斜面部の利用状況を探るため、10mごとに設置した杭を基準に方眼を組み(グリッド)、方眼に沿って土層観察用の土手を残しながら10m四方の中を徐々に掘削した。その結果、斜面部と平場の境に根切り溝状に溝がめぐる事が確認され、また、西南部には石組遺構が検出された。さらに試掘調査で「礎石」群と判断した平場の北西部にも、多数の石の存在が確認された。

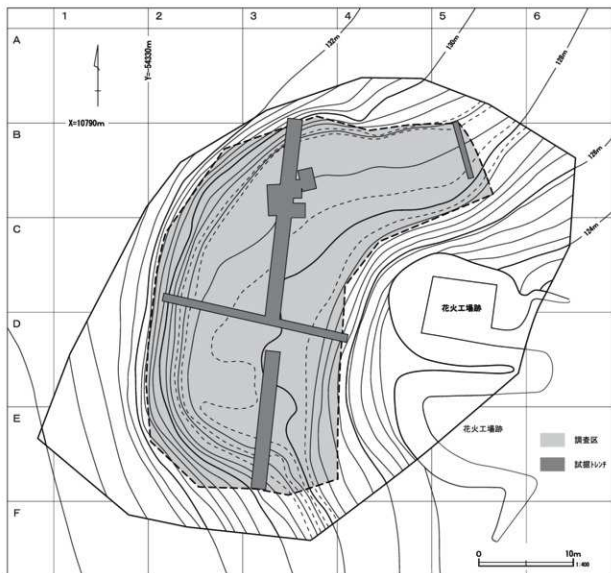
平場は、東西に走る溝で三分割される。北側の区画には、礎石や基壇などの痕跡は確認できなかったが、建物跡が存在した可能性が高い。この区画と西側の斜面との間には、多数の石がみられ、中世陶器やかわかけ皿、板碑片などが出土した。北側には、舌状に岩盤が露出し、その東は、小さな平場が付属している。礎石等は確認できないが、ここに小祠などがあったかもしれない。

中央の区画は、とくに川原石の集中や溝などを確認することはできず、また、遺物の出土もみられなかったことから、建物が存在した可能性は低いと思われる。ただし、東南の隅に鳥状の高まりが検出され、その東側には列石が見られた。

南側の区画では、石組の井戸跡2基が検出され、また東南隅と井戸の間に鳥状の高まりを確認することができた。なお、中央やや北側には大きな攪乱坑があった。







第16図 等高線図 (調査前)

平場と斜面部の境には、北から南に向かって緩く傾斜する溝が、屈曲しながら流れ、南西すみで丘陵下の谷(池)にそそいでいた。また平場の南西部では、斜面部寄りに構築された2基の石組井戸と鳥状の高まりの間に縫うように進んでいる様子が看取できた。

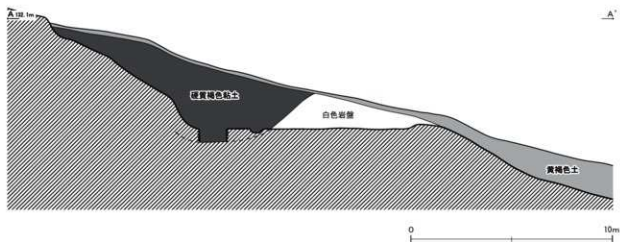
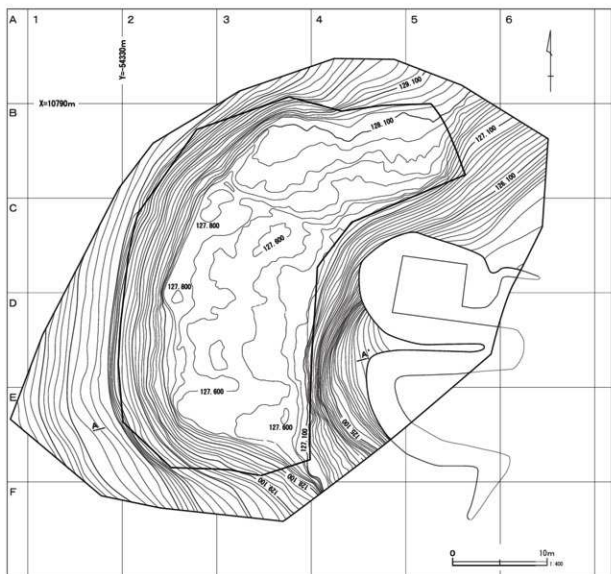
斜面部は、南西部の井戸周辺が暗褐色の硬質粘土で、その東部と北部には白色の岩盤が露出しており、白色の粘土は北側の区画の西側まで続いていた。平場は、西側から中央付近にかけて暗褐色の硬質粘土で、中央から東側には白色の岩盤を破碎した礫が盛られていた。

北側の区画に建物があったとすると、その建物から南側を臨むと、平場と斜面部には、この暗褐色と白色のコントラストが映えていたものと思われる。また、斜面部の先には、尾根伝いに林が鷲丸山まで広がり、東の崖下には、樹枝状に伸びた次の尾根、そして北に延びる深い谷が入り組んでいた。谷は、池または沼となっていたかもしれない。

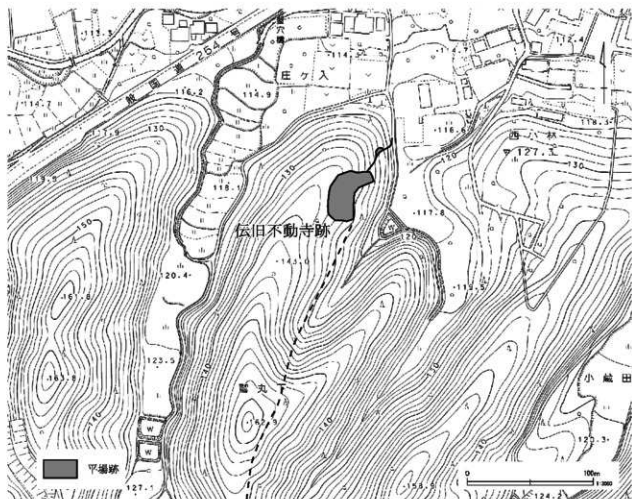
なお、発掘調査中の降雨の際に、斜面下を廻る溝に集まった雨水が、北から南へ流れることを確認した。また、丘陵上でありながら、石組井戸の底から滾々と水が湧き出ることも確認できた。こ



第17图 全测图



第18図 等高線図(掘削後)・基本土層図



第19図 平場と尾根道

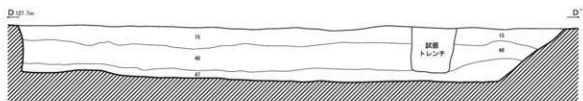
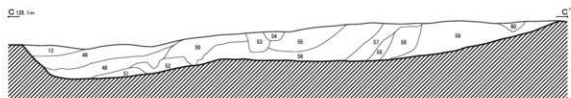
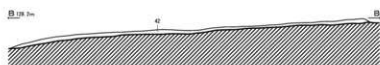
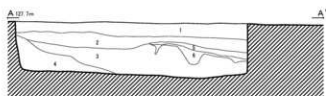
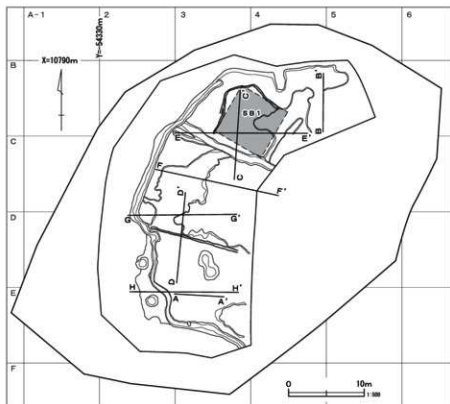
の井戸水は、鷲丸山に降った雨が伏流水となって褐色土と岩盤の間から湧き出したものであろう。

なお、現状では軽トラック一台が通れる程度の細い道が、谷津の集落からオリエンタル化学工業の工場跡地まで造られているが、本来「伝不動寺跡」の平場へは、丘陵北端部から緩い斜面を上り、平場の東北端に続く道が使われていたようである。また、かつては平場の南西端から鷲丸山に向かう道があり、春と秋には、鷲丸山頂の浅間社を祭る者が引きも切らずに訪れ、今回調査した平場北側の小平場には茶店が立っていたという。

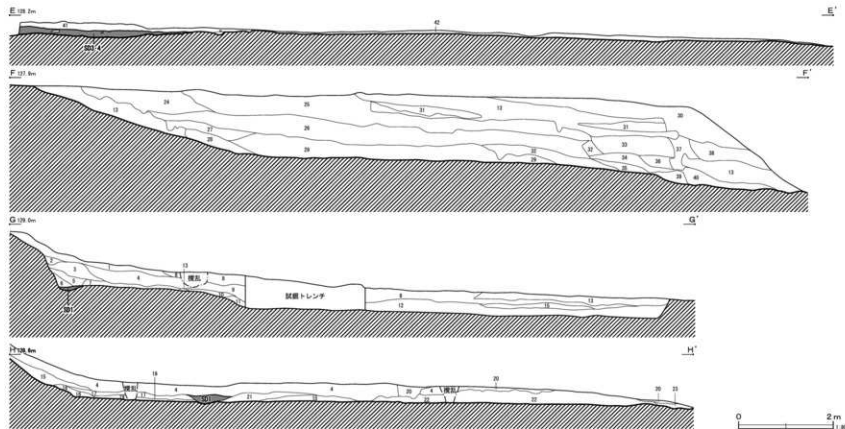
#### 地形と基本土層

本遺跡は、鷲丸山から北北東に延びる尾根の東

斜面に造られた平場で、いわゆる切土と盛土による整形が施されたもので、東及び南方向に緩やかに傾斜している。尾根の斜面部分のため堆積状況は複雑であるが、基本的には白色の岩盤層をベースに、硬質の褐色粘土が厚く堆積し、その上部を黄褐色ローム層が覆っていたものと思われる。平場として整形された現況の堆積状態を第20・21図に示しておいた。もともと斜面部のため水平堆積しづらく、崩落等の影響も多いため土層は極めて複雑な様相を呈しているが、大きくは山側（西側）に暗褐色土を主体とする土が堆積し、谷側（東側）にはローム土や岩盤土を混じた土が複雑に堆積している様子が看取できる。人為的な整形とする所以である。



第20図 土層断面図(1)



- |               |          |          |                           |
|---------------|----------|----------|---------------------------|
| 1 暗褐色土        | 21 暗褐色土  | 41 淡黄色土  | 炭化物・鐵土粒子 粘性強い             |
| 2 暗褐色土        | 22 灰黄褐色土 | 42 淡黄褐色土 | 粘性ないが、とてもしまっている固い岩盤の細砂粒含む |
| 3 暗褐色土        | 23 暗黄褐色土 | 43 暗茶褐色土 | 黄白色粒子多量                   |
| 4 暗褐色土        | 24 暗茶褐色土 | 44 暗茶褐色土 | 黄白色粒子僅か しまり強い             |
| 5 暗褐色土        | 25 暗褐色土  | 45 黒褐色土  | 黄白色粒子僅か                   |
| 6 暗黄褐色土       | 26 褐色土   | 46 暗黄褐色土 | 黄白色粒子若干 しまり強い             |
| 7 淡灰褐色土       | 27 褐色土   | 47 暗褐色土  | 黄白色粒子若干 やや粘質              |
| 8 暗黄褐色土       | 28 褐色土   | 48 黄褐色土  | 黄白色ブロック                   |
| 9 暗褐色土        | 29 褐色土   | 49 茶褐色土  |                           |
| 10 暗茶褐色土      | 30 暗茶褐色土 | 50 濃茶褐色土 | しまり強い                     |
| 11 黒褐色土       | 31 茶褐色土  | 51 灰黄褐色土 | 灰土を含む                     |
| 12 暗褐色土       | 32 暗褐色土  | 52 黄白色土  |                           |
| 13 岩盤層又は岩盤脱落土 | 33 黄褐色土  | 53 暗褐色土  | 黄白色ブロック・黒土を含む             |
| 14 灰褐色土       | 34 茶褐色土  | 54 黒土    |                           |
| 15 灰黄褐色土      | 35 茶褐色土  | 55 黄白色土  | しまり強い                     |
| 16 灰褐色土       | 36 茶褐色土  | 56 暗灰色土  | 黄白色土含む                    |
| 17 黒褐色土       | 37 黒褐色土  | 57 暗灰色土  |                           |
| 18 黒褐色土       | 38 茶褐色土  | 58 暗灰色土  | 橙色土若干含む                   |
| 19 暗褐色土       | 39 黒褐色土  | 59 灰白色粘土 |                           |
| 20 黒土         | 40 茶褐色土  | 60 灰黄褐色土 | 白色粒子多量 硬質                 |

第21図 土層断面図(2)

## 2. 遺構と遺物

### (1) 平場

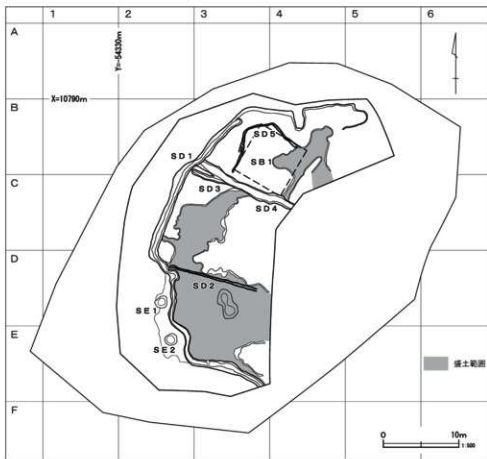
平場は、鷲丸山から北へ樹枝状にのびた丘陵尾根の東側を切り土し、土砂を東側の谷に移動させ、盛り土整形によって造成されている。広さは、東西約15m、南北約40m、標高約127.5m、面積約625㎡である。平場の最高所は128.3m、最低所は127.1mであり、勾配は約6°と緩く東側に傾斜している。なお、東への傾斜は、盛り土が永年にわたって沈降した結果かもしれない。

平場は、2本の溝によって3つの区画（北区画、中央区画、南区画）に分割される。北区画と中央区画はSD3、SD4、中央区画と南区画はSD2によって分割される。なお、SD3、SD4は、SD1と連続し、丘陵斜面部から染み出した伏流水を集め、平場の下に排出する機能を備えていたが、SD2は、細く浅い溝跡であることから、大

きな構造物ではなく、小さな遮蔽物を設置した溝と理解したい。

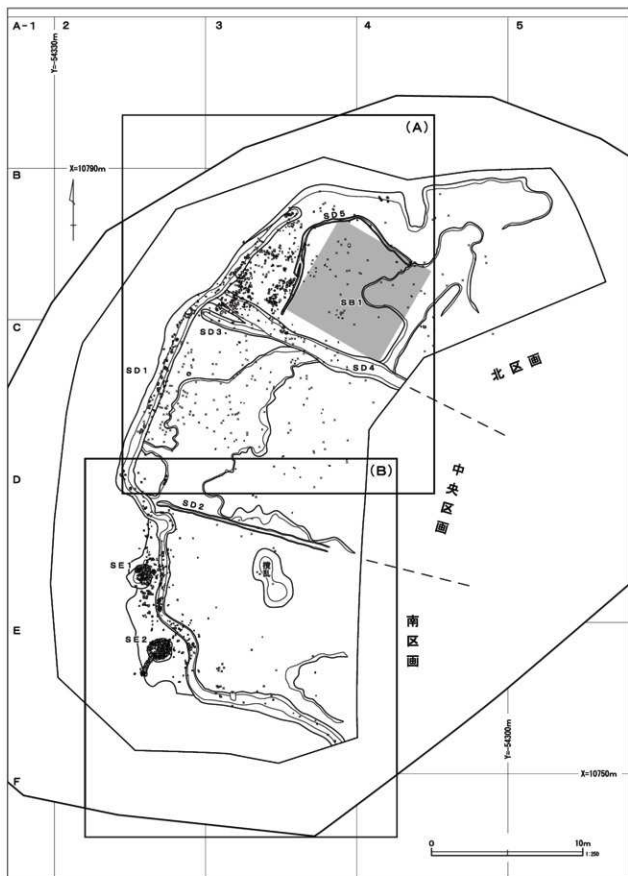
北区画 北の区画は、北側の中央付近で南側に岩盤が舌状に突出する。岩盤を削り残して整形されている。この突出部の上部に梅の樹が植えられていたため岩盤の上部は、やや破壊されていた。そして西から東に向かうSD4と西側のSD5とに囲まれた空間のなかに建物があったと考えたい。

なぜならば、このSD5とSD1の間に中世陶磁器や在地産の播り鉢、板碑片などが、出土量は決して多くはないが出土したこと、人頭大の石材が、白色岩盤の上に貼り付けるように置かれていたこと、わずか一石であるが、やはり人頭大の扁平な川原石が、SD5の内側に水平に置かれていたからである。



第22図 平場造成図

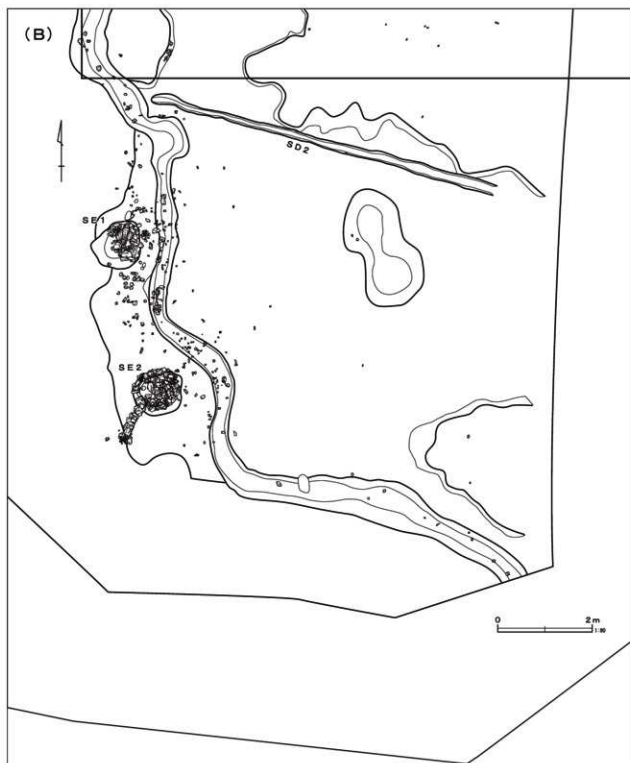




第23图 平場石分布图 (1)



第24図 平場石分布図(2)拡大(A)



第25図 平場石分布図(3)拡大(B)

北区画は、南北約11m、東西約22mの細長い五角形をしている。面積約116㎡である。この区画の東側には、南北10m、東西9mほどの平坦部が続く。小規模な堂宇や祠などがあった可能性は高い。

ところで、白色の岩盤（平場）に貼り付けられた自然石であるが、その出土状態からは、明瞭な規則やモザイク性はみられない。しかし、白色の石と緑色の石、褐色の石を選択してこの平場に持ち込んだことから、当初は、明確な装飾性を持っていたことと考えられる。

また、一石の礎石を除いて建物跡は、基壇や柱穴など建物の規模や構造を推定できる情報に乏しい。しかし、中央やや南の網がけをした範囲には、わずかだが、炭化物と灰、焼土の広がる場所を確認できた。ただし、明確な掘り込みや被熱された地山などの範囲は、つかむことができなかった。ちょうどこの場所に土層観察の土手を設定したため、偶然にも観察ができたのである。

この炭化物や灰、焼土の出土は、この建物の内部で食事や暖房のために火を焚いた痕跡と考えたい。これは、谷津の集落に残る「かつて不動寺が火事となり、現在の場所に移ってきた」という証拠にはならない。火災にしては、あまりにも焼土が少なすぎるからだ。

この焼土等の検出は、この建物に土間があったことを裏付けるのかもしれない。ここでは、小規模な「堂」や修行のための「房」などを推定しておきたい。

中央区画 中央の区画は、南北約14m、東西約17mの方形の区画である。面積約240㎡という広い空間が広がるが、礎石や基壇など建物の存在した可能性は低い。中央から東側は、白色の岩盤がみられ、西側は暗褐色粘土が露出する。

S D Iにそった部分は、やや西側に突出する。西南隅と西北隅には、小さな鳥状のふくらみがある。とくに西南隅の鳥状起伏の東側裾には、犬頭

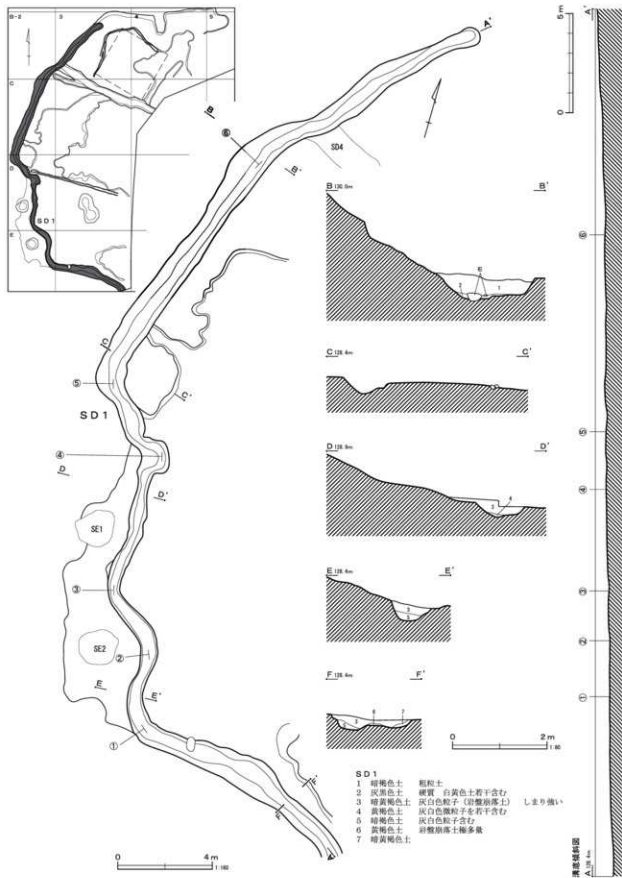
大の石材6個が一列に並べられ、島の範囲を区画している。鳥状の起伏の上面には、特別の細工はない。しかし、S D Iが、この鳥状の起伏を回りこんでさらに南に続いていることから、平場に作られた点景の一つと考えたい。鳥状の起伏は、南北1.8m、東西1.4mの楕円形である。

南区画 南の区画は、南北約12m、東西約15mの方形の区画である。面積約180㎡という空間が広がるが、礎石や基壇などはみられず、建物は建てられていなかったと考えられる。中央やや北よりひょうたん型の窪地が見られたが、最近の攪乱と判断した。また、東南隅に白色の岩盤が露出し、わずかながら高くなっていた。他の部分は、暗褐色粘土が露出する。

S D Iは、中央区画と南区画の境目から蛇行しはじめ、S E 1とS E 2を迂回しつつ東へ向かう。そして、丘陵裾を回り込むように南へ向かい、徐々に丘陵下の谷へと向かっていく。南区画の西側崖際には、犬頭大の石材が散乱し、当初は、平場を造成したときの法面の保護かと考えた。しかし、二つの石組井戸、さらには石組井戸につながる石列の出現によって石材の多くは、蛇行する溝の化粧や崖下、井戸周辺を飾っていたと考え、長年の土砂の流出で平場側に押し出されたと考えた。

なお、二つの井戸のある南区画の西側斜面は、他の法面に比べ緩く傾斜し、散乱する石材の数も多かった。また、S E 2付近の崖面は、暗褐色粘土が露出し、崖面を東、あるいは北に沿っていくと、白色岩盤が露出する。そして、その境目は、とても明瞭であり、崖面の白と暗い茶色、薄緑色の石材のコントラストがとても鮮やかである。

ところで、本遺跡の発掘調査を10月から12月にかけて行ったことで、この平場に朝早くから日が当たり、午後4時ごろには日陰となること、北側や西側の崖で北西の空っ風が当たらないこと、そのかわり樹木の落ち葉がたくさん舞い落ちたことなど、平場をめぐる環境の変化がわかった。



第26図 第1号溝跡

## (2) 溝跡

### 第1号溝跡 (第26図)

造成した崖線下に沿ってめぐる溝である。調査区内では、幅0.8~2m、深さ約0.4mの溝を長さ50mにわたって検出した。北側は、北区画の北隅部で閉じるが、南側は、丘陵の等高線に沿って消えていく。崖面から染み出る水を排水する目的で崖線に沿って掘削されたと考えたい。原位置をとどめる石材は少ないが、溝の東側肩部には、犬頭大の石材が散乱していた。おそらく、石材は、SD1の東側肩部に並べられていたと考えたい。

### 第2号溝跡 (第27図)

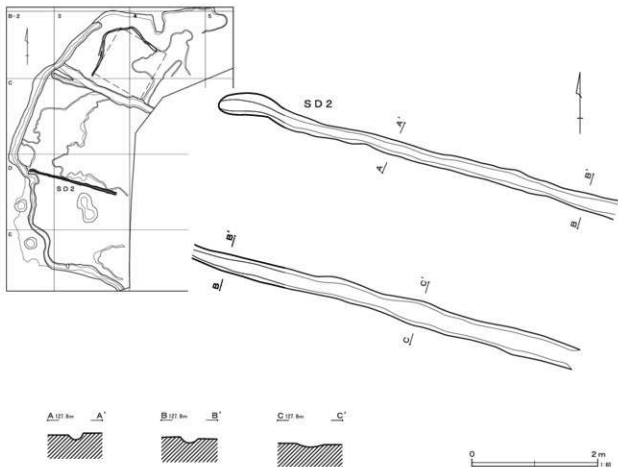
南区画と中央区画を区切る溝である。SD1と連結せず、水の流れた痕跡も確認できなかった。排水用の溝ではなく、平場を三分割するための溝

と考えたい。幅0.3m、深さ0.1mの溝を東西に約12mにわたって検出した。東側は、溝の深さが浅くなり途切れた。なお、この溝の周囲には、石材を確認できなかった。

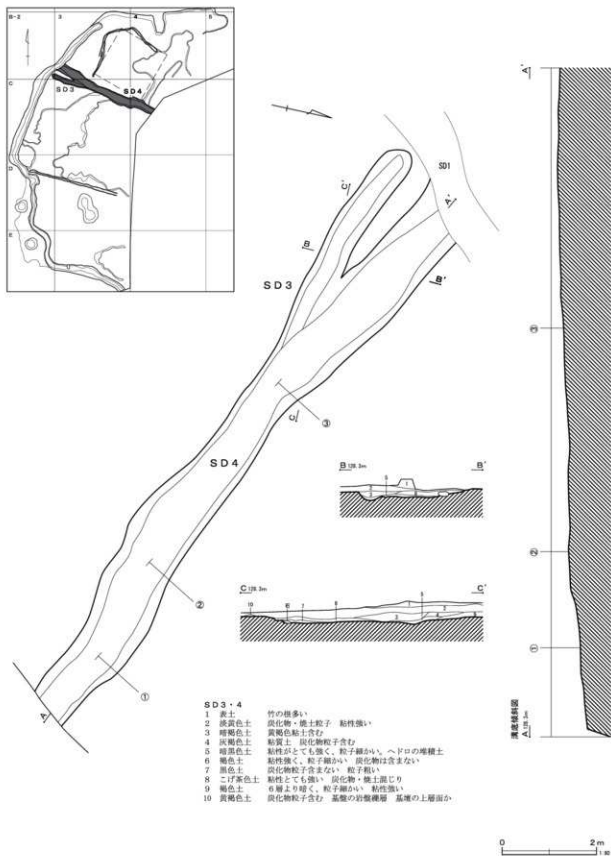
### 第3号溝跡 (第28図)

北区画と中央区画を区切る溝である。SD4に切られる。幅約0.6m、深さ約0.3mの溝を東西に長さ約5mにわたって検出した。本来、SD4と重複した箇所に掘り込まれていたと考えたい。SD1とは連結しないことから、SD2のように平場を三区画に分断する目的で掘削されたと考えたい。

しかし、北区画の西南隅から染み出す水量が豊富過ぎたとき、または、井戸などの南側からの水が、SD1を逆流した場合、北区画に水が流れ込



第27図 第2号溝跡



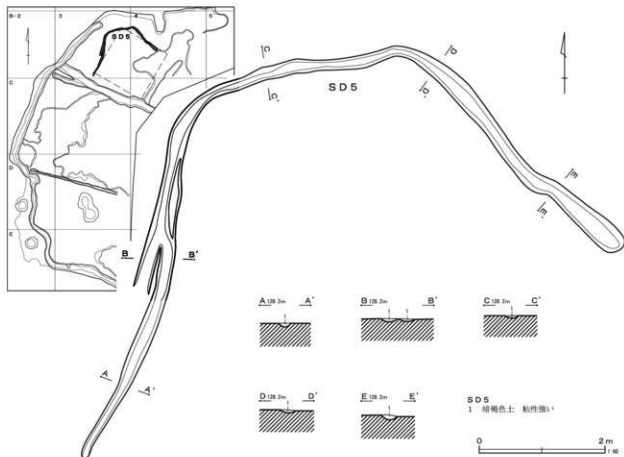
第28図 第3・4号溝跡

んでしまう。そのため、SD1と連結したSD4が再掘削されたと考えたい。

#### 第4号溝跡 (第28図)

第3号溝同様、北区画と中央区画を区切る溝である。SD3を切る。SD1と連結し、西から東に延びる。幅1~1.4m、深さ約0.2mの溝を東西に長さ約13mにわたって検出した。SD1の排水能力を超えたとき、SD4を伝い東側の平場下へ排水されたと考えた。

第28図には、西から東に向かう溝底の傾斜を示した図を掲載した。第1号溝の連結部から東に約5mまでは、西が低く東が高いが、この地点を境に東に向かって低くなっていく。これは、この地点をオーバーフローした水のみが、東側に排水され、本来は、南に向かって流下して行く仕組みになっているのである。



第29図 第5号溝跡

#### 第5号溝跡 (第29図)

北区画に掘削された溝である。建物を想定した場所の北側から西にかけて、細い溝がめぐっていた。幅約0.3m、深さ約0.1mの溝を長さ約14mにわたって検出した。建物の雨落ち溝か排水溝と考えた。

### (3) 井戸跡

#### 第1号井戸跡 (第30図)

D-2グリッドの中央付近に確認した。石組井戸である。石組の内法は、径約1.3mを測り、深さは、地表から0.5mを測る。まず、井戸の掘り方を浅い円形土壇(径約1.4m、深さ約0.5m)状に掘る。井戸底は、硬質褐色粘土と白色岩盤の境目まで掘られる。石組は、崖側となる西側には行われず、北、東、南にかけてみられた。第30図は、



井戸の石組を図化した。発掘調査の手順に従い、上部から石を外した図を作成した。

表土を除去した状態（1・2面）では、井戸の内側に大形の石材が乱雑に入り込み、石組の井戸と分からなかった。しかし、大形の石材を除去したところ（3面）井戸の石組が現れた。ただし、崖側の石組がなく、にわかに石組井戸と判断しにくかった。しかし、降雨の後、井戸底の岩盤から水が染み出したことから、井戸跡と判断した。

石組井戸の北側0.5m、南側0.5mには、東西に並ぶ石列を一つずつ確認した。第1号溝に向かって10センチ大の石材が、並べられている。また、石組井戸の東に接した場所に5センチ大の小石が、一箇所に集められていた。

石組井戸の石組は、犬頭大の石材を井戸の円弧にそって横置きしていた。三から四段の乱石積みである。井戸の底部にも石材は散乱していたが、石材を敷き詰めた様子はなく、井戸の構築材や第1号溝の化粧石を廃棄したと考えた。

#### 第2号井戸跡（第31図）

E-2グリッドの北東部に確認した。第1号井戸跡と同様、石組井戸である。石組の内法は径約1.3m、深さは地表から約0.7mを測る。まず、井戸の掘り方をやや深い円形土壇（径約1.5m、深さ約0.8m）状に掘る。井戸底は、白色岩盤を掘りぬき、青灰色の岩盤まで掘られる。石組は、井戸の内側全面に行われる。

また、井戸から崖面に向かって石列が延びていた。石列は、東南側の面を揃えて並べられていた。石列と崖が接する場所には、親指大の小石が多数集められていた。なお、石列の内側（北西）には、裏込めや土砂のたたき締めなどは行われなかった。

井戸の石組は、人頭大の石材を七、八段平積みしていた。やはり掘り方との間には裏込めや粘土をはった痕跡は見られなかった。第31図は、井戸の石組を図化した。発掘調査の手順に従い、上部

から石を外した図を作成した。

表土を除去した状態（1面）では、井戸の内側に大形の石材が乱雑に入り込み、全体像はわからなかった。しかし、石列が明瞭に確認され、続いて井戸上部北半の石列が、匙状に屈曲したため、ここに小規模な池が存在したのではないかと考えた。

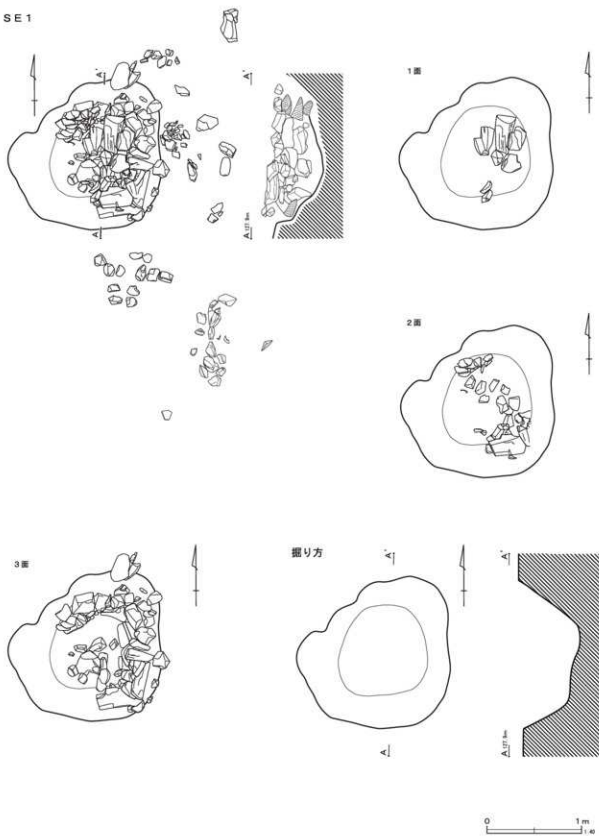
けれども、大形の石材を除去したところ（2面）石組井戸の輪郭が現れた。石組の東半分は大きく崩れ、井戸の内側に倒れこんでいた（3面）。おそらく、第2号井戸の内側には、井戸の石組以外の石材も廃棄されていたと考えられる。当初は、丘陵内の平場に石組井戸の存在を疑問視したが、井戸底から20cmの覆土は、常時帯水層でグライ土壌化していた。この土層を除去した後は、岩盤の隙間から水が染み出し、一定量の水が井戸に溜まった。

#### （4）建物跡（第24図）

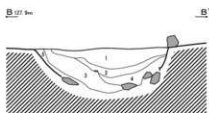
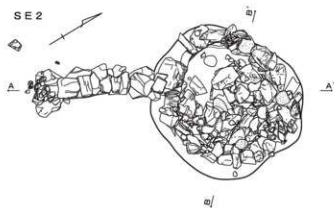
北区画の中央付近に建物跡を想定した。明確な礎石や基壇、地業などは確認できなかったが、東西約4m、南北約4mの方形の範囲が、建物が建てられていた範囲と想定した。その理由は、わずかに一石だが、円形の礎石を検出したこと、土層断面に焼土と炭化物、灰層の土壇を確認したこと、SD5が、不自然にめぐること、北区画の西側から土器や陶磁器などの生活雑器が出土したことなどから、ここに建物が建てられていた可能性を指摘しておきたい。

小規模な堂、または僧侶の修行する坊（房）などのような建物を想定したい。

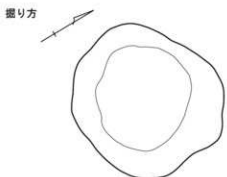
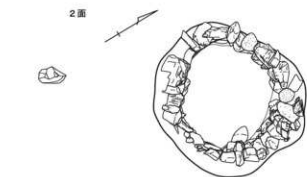
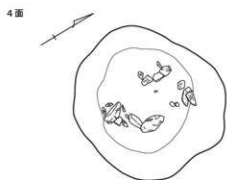
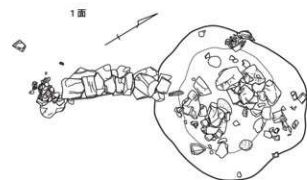
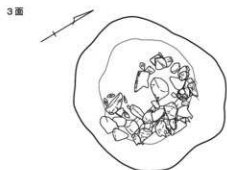
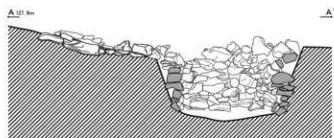
SE 1



第30図 第1号井跡



- SE 2 掘集申
- |   |        |                   |
|---|--------|-------------------|
| 1 | 淡黄褐色土  | 白色の岩層くずを多く含む、粘性強い |
| 2 | 暗褐色土   | 岩層くず少量、粘性強い       |
| 3 | こげ茶色土層 | ざらざらの砂礫を多く含む      |
| 4 | 淡褐色土層  | 細かな黄砂土、岩層くず少量     |
| 5 | 暗灰色土   | 粘性強く粒子粗い          |



0 1m 1:10

第31図 第2号井戸跡

## (5) 出土遺物 (第33図～36図)

### 第1号溝跡出土遺物

1は第1号溝跡(B-4グリッド)からの出土である。種別は土器、器種は甕と思われる。現存高は1.9cm、11と同一個体の可能性が考えられる。2点を合わせた現存高は7.1cm、残存率は5%程である。胎土は灰黄褐色で、雲母・角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化著しく、土器の欠け口は部分的に丸味を帯びている。

2は、第1号溝跡(B-3グリッド)からの出土である。種別は瓦質土器である。僅かではあるが、内外面にススが付着していることから、器種は土鍋と考えられる。現存高6.7cm、残存率は10%である。胎土は灰黄色で、僅かに白色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化著しく、欠け口は全体的に丸味を帯びている。

3は、第1号溝跡(C-2グリッド)からの出土である。種別は瓦質土器で、器種は土鍋または鉢と考えられるが、現状ではススの付着は認められないことから、鉢の可能性が高い。現存高3.8cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土はにぶい褐色で、雲母・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化しており、欠け口はやや丸味を帯びている。

4は、第1号溝跡(D-2グリッド)からの出土である。種別は瓦質土器である。器種は土鍋または鉢と考えられる。外面は被熱のため赤色化しているが、現状ではススの付着は認められない。鉢であろうか。現存高2.8cm、残存率5%以下の小破片である。胎土はにぶい黄褐色で、白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化し、欠け口は僅かに丸味を帯びている。

5は、第1号溝跡(B-3グリッド)からの出土である。種別は瓦質土器である。器種は土鍋または鉢と考えられるが、外面に僅かながらススが付着していることから土鍋の可能性が高い。なお、

現存高や器形からみて焙烙とは考えがたい。現存高6.7cm、残存率は20%である。胎土は灰褐色で、雲母・石英・白色粒子・黒色粒子・針状物質を含む。焼成は普通。器面の風化の度合いは低いが、欠け口はやや丸味を帯びている。

6は、第1号溝跡(D-2グリッド)からの出土である。接合はしなかったものの、同一個体と思われる破片が、D-3、E-3グリッドから1点ずつ出土している。また、46・47と同一個体の可能性がある。種別は陶器、器種は皿(大皿)である。瀬戸・美濃系。口径(27.0)cm、現存高3.7cm、残存率10%である。胎土は灰白色で、白色粒子・黒色粒子を含む。内外面とも、口縁部に灰釉が施されている。焼成は良好。轆轤成形。軸が剥離しているが、風化の度合いは低く、欠け口も鮮明である。

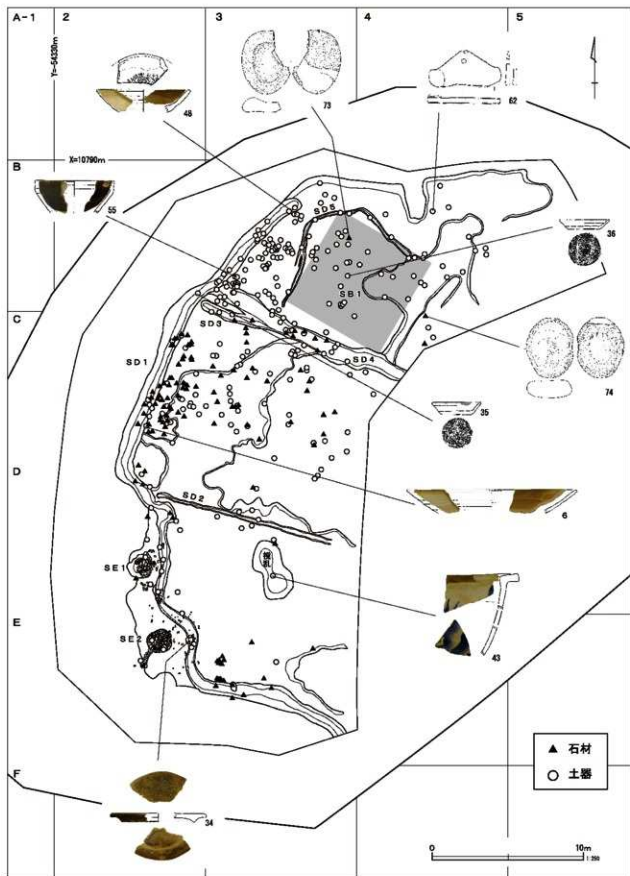
### 第4号溝跡出土遺物

7は、第4号溝跡(B-3グリッド)およびその近辺からの出土である。種別は瓦質土器である。外面にススが付着していることから、器種は土鍋と考えられる。現存高6.8cm、残存率は10%である。胎土は黄褐色で、雲母・石英・砂粒子・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化しているが、特に内面では著しい。土器の欠け口は、部分的に丸味を帯びている。

8は、第4号溝跡(B-3グリッド)からの出土である。一方は欠損している。錆化著しいが、その形状・法量から頭巻釘と推定される。現存長4.0cm、頭幅1.2cm・下端部幅0.7×0.6cm、重さ8.2gを測る。残存率は50%程であろうか。

### 第5号溝跡出土遺物

9は、第5号溝跡(B-3グリッド)からの出土である。種別は白磁であり、器種は碗であると思われる。現存高2.4cm、残存率5%。胎土は灰白色で、僅かに白色粒子・黒色粒子を含み緻密である。轆轤成形。舶載品と思われる。



第32図 遺物分布図

## 第1号井戸跡出土遺物

10は、第1号井戸跡からの出土である。種別は瓦質土器である。器種は、焙烙または土鍋と考えられる。僅かではあるものの、外面にはススが付着している。現存高2.8cm、残存率5%以下の小破片である。胎土は灰褐色で、石英・白色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化著しく、欠け口は丸味を帯びている。

## 遺構外出土遺物

第33図11～第35図61は、遺構外の中・近世の土器類である。以下グリッド順に記述していく。

11は、B-3グリッドからの出土である。種別は土器、器種は甕と思われる。現存高は5.9cm、1と同一個体の可能性が考えられる。2点を合わせた現存高は7.1cm、残存率は5%である。胎土は灰黄褐色で、雲母・角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化著しく、土器の欠け口は部分的に丸味を帯びている。

12は、E-2グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は土鍋または鉢と考えられるが、現状ではススの付着はみられないことから、鉢と推定した。現存高3.3cm、残存率は5%である。胎土はにぶい黄褐色で、雲母・白色粒子・赤色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化著しく、欠け口は全体的に丸味を帯びている。

13は、D-2グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は土鍋または焙烙であると思われる。外面には、僅かではあるがススが付着している。現存高2.5cm、残存率は5%である。胎土は灰黄色で、雲母・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化しており、欠け口もやや丸味を帯びている。

14は、B-3グリッドからの出土である。種別は土器で、器種は土鍋または鉢であると思われるが、現状ではススの付着はみられないことから、

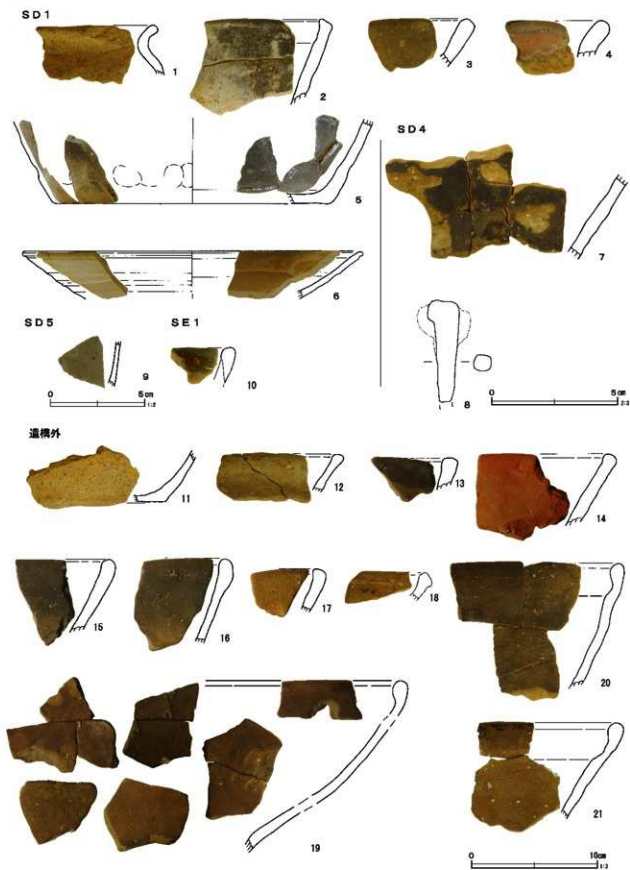
鉢の可能性が高いと考えられる。現存高5.7cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は明赤褐色で、雲母・石英・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は、内外面ともに比較的風化が少ないが、欠け口は部分的に丸味を帯びている。

15は、B-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は鉢または土鍋と考えられるが、現状ではススの付着はみられないことから、鉢の可能性が高い。現存高5.8cm、残存率は5%である。胎土は灰黄褐色で、雲母・石英・砂粒子・白色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化が著しく、欠け口は全体的に丸味を帯びている。

16は、B-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は土鍋または鉢と考えられるが、現状ではススの付着は認められないことから、鉢の可能性が高い。現存高6.6cm、残存率は5%である。胎土は黄褐色で、雲母・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化しており、欠け口は丸味を帯びている。

17は、C-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は土鍋または鉢と考えられるが、現状ではススの付着はみられないことから、鉢の可能性が高い。現存高3.0cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は灰黄色で、雲母・白色粒子・赤色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化著しく、欠け口は全体的に丸味を帯びている。

18は、B-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は土鍋または鉢と考えられるが、現状ではススの付着は認められないことから、鉢の可能性が高い。現存高2.3cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は明赤褐色で、雲母・角閃石・石英・白色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化しており、欠け口はやや丸味を帯びている。



第33図 出土遺物(1)

19は、同一個体と思われる破片を実測図中の写真に示した。B-3、D-3、E-2グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は土鍋または鉢であると推定される。僅かではあるが、外面にススの付着が認められることから、土鍋の可能性が高い。図示した破片による現存高は12.7cmである。残存率は10%程度と推定される。胎土は灰黄褐色で、雲母・角閃石・石英・砂粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化しており、欠け口は丸味を帯びている。

20は、B-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は、鉢または土鍋であると思われるが、ススの付着が認められないことから、鉢の可能性が高い。現存高9.9cm、残存率は15%である。胎土にはぶい黄褐色で、雲母・石英・砂粒子・白色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化が著しく、土器の欠け口は部分的に丸味を帯びている。

21は、B-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は、鉢または土鍋であると思われるが、口縁部外面にスラスリき付着が認められることから、土鍋の可能性が高い。現存高7.5cm、残存率は10%である。胎土は黄褐色で、雲母・石英・砂粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化が著しく、土器の欠け口は部分的に丸味を帯びている。

22は、同一個体と思われる破片を実測図中の写真に示した。いずれもB-3グリッドからの出土であるが、この内の1点は第1号溝跡から出土した。種別は瓦質土器で、器種は土鍋または鉢と考えられる。僅かではあるが、外面にススの付着が認められることから土鍋の可能性が高い。図示した破片による現存高は10.1cmである。残存率は10%程度と推定される。胎土は黄灰色で、雲母・石英・砂粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化しており、欠け口はやや丸味を帯びている。

23は、B-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は、鉢または土鍋と考えられるが、現状ではススの付着はみられないことから、鉢であると考えておく。現存高8.8cm、残存率は10%である。胎土は灰黄褐色で、雲母・角閃石・石英・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化著しく、欠け口は部分的に丸味を帯びている。

24は、B-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は土鍋または鉢であると考えられるが、外面にススが付着していることから、土鍋の可能性が高い。現存高4.8cm、残存率5%以下の小破片である。胎土は黄灰色で、雲母・石英・白色粒子・黒色粒子・針状物質を含む。焼成は普通。器面の風化の度合いは低いが、欠け口は僅かに丸味を帯びている。

25は、E-2グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は鉢であると推定される。外面には僅かに炭化物が付着しているが、ススは認められない。現存高4.7cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は灰色で、角閃石・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面の風化の度合いは低く、欠け口は比較的鮮明である。

26は、D-2グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は焙烙または土鍋であると推定される。ごく僅かではあるが、外面にススが付着している。現存高7.3cm、残存率は5%である。胎土は灰白色で、雲母・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化著しく、欠け口は丸味を帯びている。

27は、B-3・4グリッドからの出土である。2点の破片は接合しないが、同一個体と判断した。種別は瓦質土器で、器種は土鍋である。外面にはススが付着している。現存高3.5cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は灰黄褐色で、雲母・角閃石・石英・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面の風化の度合いは低いが、



欠け口は丸味を帯びている。

28は、C-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は焙烙であると思われる。内外面ともにススが付着している。現存高2.8cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は褐灰色で、角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は内外面ともに風化が少なく、欠け口も鮮明である。

29は、C-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は焙烙であると思われる。外面には、ススが付着している。現存高2.0cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は褐灰色で、角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は、やや風化している。欠け口は部分的に丸味を帯びている。

30は、C-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は焙烙であると思われる。外面には、僅かではあるがススが付着している。現存高2.0cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は褐灰色で、角閃石・石英・白色粒子・赤色粒子を含む。焼成は普通。器面の風化は少ないものの、欠け口はやや丸味を帯びている。

31は、D-2グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は土鍋または焙烙と考えられる。外面には、僅かながらススが付着している。現存高2.9cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は黄橙色で、角閃石・白色粒子・赤色粒子を含む。焼成は普通。器面の風化は少なく、欠け口も比較的鮮明である。

32は、D-3グリッドからの出土である。種別は瓦質土器である。器種は焙烙であると考えられる。外面にはススが付着している。現存高2.9cm、残存率5%以下の小破片である。胎土はにぶい橙色で、角閃石・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面の風化の度合いは低いが、欠け口はやや丸味を帯びている。

33は、C-3グリッドからの出土である。種別

は瓦質土器で、器種は焙烙または土鍋であると推定される。ごく僅かではあるが、外面には、ススが付着している。現存高2.5cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土はにぶい褐色で、雲母・角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化著しく、欠け口は丸味を帯びている。

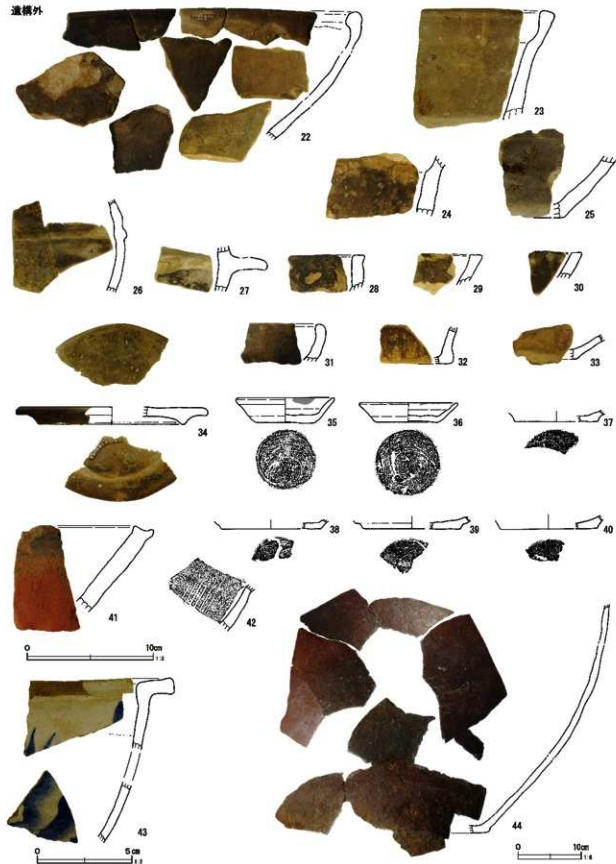
34は、C-2グリッドからの出土である。種別は瓦質土器で、器種は蓋であると推定される。蓋径15.2cm、内径11.3cm、器高1.4cm、残存率は15%である。胎土は灰黄褐色で、雲母・片岩・角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。器面は風化著しい。

35は、B-3グリッドからの出土である。土師質小皿の、いわゆるカワラケである。口唇部に油煙が付着していることから、灯明皿として用いられていたと考えられる。外面の一部分が赤色化しているが、焼成時のものか二次的被熱によるのかは判別できない。口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.1cm、残存率85%である。胎土はにぶい橙色で、雲母・角閃石・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。軸轆整形で、底部は回転糸切り離しである。焼成は普通。器面の遺存状況は比較的良好である。

36は、B-2グリッドからの出土である。土師質小皿の、いわゆるカワラケである。口唇部に油煙が付着していることから、灯明皿として用いられていたと考えられる。口径7.8cm、器高2.0cm、底径4.8cm、残存率85%である。胎土はにぶい橙色で、雲母・角閃石・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。軸轆整形で、底部は回転糸切り離しである。焼成は普通。器面の遺存状況は比較的良好である。

37は、C-2グリッドからの出土である。土師質小皿の、いわゆるカワラケである。現存高0.9cm、底径(6.6)cm、残存率15%である。胎土はにぶい橙色で、赤色粒子・黒色粒子を含む。軸轆整形で、底部は回転糸切り離しと推定される。焼

遺構外



第34図 出土遺物(2)

成は普通。器面は風化が著しく、欠け口は丸味を帯びている。

38は、C-3グリッドからの出土である。土師質小皿の、いわゆるカワラケである。現存高0.8cm、底径(7.9)cm、残存率10%である。胎土はにぶい橙色で、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。轆轤整形で、底部は回転糸切り離しと推定される。焼成は普通。器面は風化著しく、欠け口は丸味を帯びている。

39は、C-3グリッドからの出土である。土師質小皿の、いわゆるカワラケである。現存高1.0cm、底径(7.6)cm、残存率15%である。胎土はにぶい黄橙色で、赤色粒子・黒色粒子を含む。轆轤整形で、底部は回転糸切り離しと推定される。焼成は普通。器面は風化が著しく、欠け口は丸味を帯びている。

40は、C-3グリッドからの出土である。土師質小皿の、いわゆるカワラケである。現存高1.1cm、底径(7.6)cm、残存率10%である。胎土は橙色で、赤色粒子・黒色粒子を含む。轆轤整形で、底部は回転糸切り離しと推定される。焼成は普通。器面は風化が著しく、欠け口は丸味を帯びている。

41は、B-3グリッドからの出土である。種別は陶器で、器種は鉢であると思われる。ススの付着はみられない。現存高6.8cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は赤褐色で、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。焼成は良好。器面の風化は少なく、欠け口は鮮明である。

42は、D-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は擂鉢である。現存高3.6cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は黄褐色で、白色粒子を僅かに含む。焼成は良好。内外面とも鉄釉が施されている。卸目は8本/条。轆轤成形と思われる。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため、時期は判断できなかった。

43は2点の破片を同一個体として図示した。D-2・3グリッドからの出土である。種別は陶器、

器種は鉢と考えられる。両者を合わせての現存高は7.3cmとなる。残存率は、2点を合わせても5%程である。胎土は浅黄色で、白色粒子・黒色粒子をごく僅かに含む。焼成は普通。口縁部は内外面、胴部では外面に灰釉が施されており、いずれの面も細かな貫入が多く認められる。口唇部と胴部外面には、筆描による染付けをもつ。轆轤成形。胎土からみて瀬戸・美濃系と考えられるが、時期の特定には至らなかった。

44は、同一個体と思われる破片を実測図中の写真に示した。B-3、C-2、D-2グリッドからの出土である。これらの破片の内1点は、第1号溝跡の上場線に接するような位置から出土している。種別は陶器で、器種は甕であると推定される。常滑系。僅かではあるが、外面にススの付着が認められる。図示した破片による現存高は36.0cmである。残存率は15%程度と推定される。胎土は灰赤色で、石英・砂粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は良好。器面の風化の度合いは低く、欠け口は鮮明である。

45は、B-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は皿である。口径(11.3)cm、現存高2.8cm、残存率は5%である。胎土は黄褐色で、白色粒子と黒色粒子を僅かに含む。焼成は良好。外面は、口縁部に灰釉が施されているが、それ以下は土見せとなっている。内面は、遺存範囲内では灰釉が施されている。轆轤成形。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため時期は特定できないが16世紀末と推定される。

46は、D-2グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は皿(大皿)と推定される。6・47と同一個体の可能性がある。瀬戸・美濃系。底径(9.8)cm、現存高2.8cm、残存率10%であるが、47と合わせれば15%となる。胎土は灰白色で、白色粒子・黒色粒子を含む。内外面とも無釉である。焼成は良好。轆轤成形。底部は回転ヘラ削りである。風化の度合いは低いが、欠け口はやや丸味を

帯びている。

47は、B-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は皿と推定される。6・46と同一個体の可能性がある。瀬戸・美濃系。底径(9.6)cm、現存高2.2cm、残存率5%であるが、46と合わせれば15%となる。胎土は灰白色で、白色粒子・黒色粒子を含む。内外面とも灰釉と思われる痕跡がある。焼成は良好。轆轤成形。底部は回転ヘラ削りである。風化の度合いは低いが、欠け口は丸味を帯びている。

48は、B-3グリッド内の、第1号溝跡から距離約20cmの位置から出土した。種別は陶器、器種は皿(卸皿)である。瀬戸・美濃系。口径(15.0)cm、現存高3.5cm、残存率20%である。胎土は灰白色で白色粒子・黒色粒子を含む。内外面とも、口縁部に灰釉が施されており、細かな貫入が多くみられる。焼成は良好。轆轤成形。卸目が、ヘラ状工具によるのか櫛状工具によるのかについては、遺存部分が小さいため特定できない。外面の底部付近に、胎土の粒が1つ付着しているが、重ね焼きの際の「目」であろうか。時期は16世紀後半と思われる。

49は、2点の破片からなる。口縁部はB-4グリッド、高台部は第4号溝跡(B-3グリッド)からの出土であるが、同一個体であると判断した。種別は陶器、器種は皿である。現存高2.9cm、残存率は5%である。胎土は浅黄色で、白色粒子・砂粒子を僅かに含む。焼成は良好。見込み～高台際に掛けては長石釉が施されているが、その他の部分は無釉である。施釉部分には、貫入のほか気泡も認められる。轆轤成形、削り出し高台。瀬戸・美濃系の志野と考えられる。時期は16世紀末～17世紀前葉と推定される。

50は、D-3グリッドからの出土である。種別は陶器である。器種については、小破片であるため特定できないが、碗または皿であると思われる。現存高1.2cm、残存率は5%である。胎土は浅黄

色で、白色粒子・黒色粒子を僅かに含む。焼成は良好。壘付以外の面には、長石釉が施されている。軸には、貫入のほか気泡も認められる。轆轤成形、削り出し高台。瀬戸・美濃系の志野である。時期は16世紀末～17世紀前葉と推定される。

51は、D-2グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗(平碗)である。口径(17.8)cm、現存高3.0cm、残存率は5%である。胎土は灰黄色で、黒色粒子を僅かに含む。焼成は良好。内外面ともに灰釉が施されており、両面ともに細かな貫入が多くみられる。轆轤成形。瀬戸・美濃系。時期は16世紀後半と推定される。

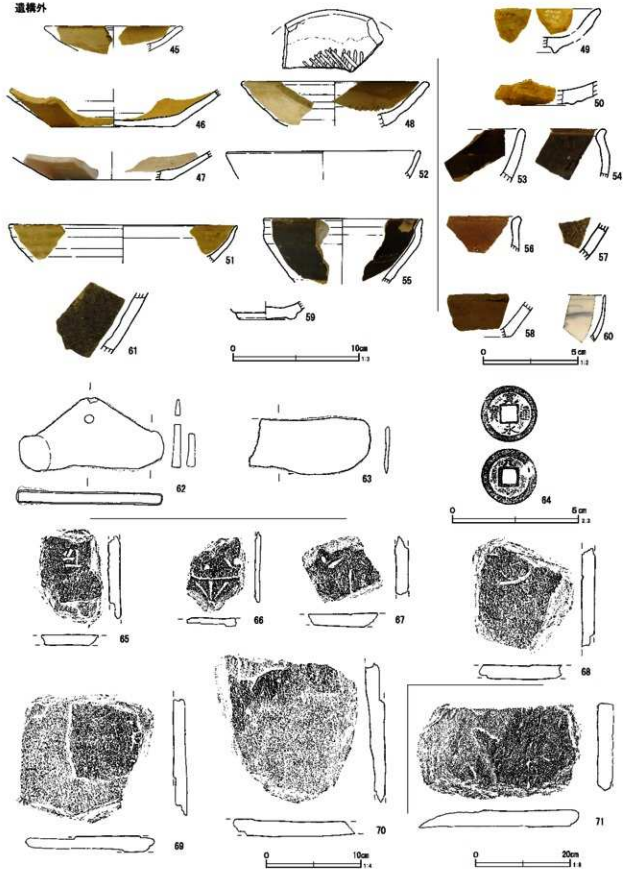
52は、B-4グリッドからの出土である。種別は青磁であり、器種は碗であると思われる。現存高2.2cm、残存率5%。胎土は灰白色で、僅かに白色粒子を含み、緻密である。焼成は良好。轆轤成形。舶載品と思われる。

53は、D-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗(天目碗)である。現存高2.8cm、残存率は5%である。胎土は浅黄色で、白色粒子と黒色粒子を僅かに含む。焼成は良好。内外面ともに鉄釉である。轆轤成形。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため、時期の特定は困難であるが、16世紀末～17世紀前葉であろうか。

54は、C-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗(天目碗)である。現存高2.5cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は灰黄色で、白色粒子を僅かに含む。焼成は良好。内外面ともに鉄釉である。轆轤成形。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため、時期の特定は困難であるが、16世紀末～17世紀前葉と推定される。

55は、B-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗(天目碗)である。口径(12.4)cm、現存高4.7cm、残存率は10%である。胎土は灰白色で、白色粒子と黒色粒子を僅かに含む。焼

透模外



第35图 出土遺物(3)

成は良好。内外面ともに鉄軸であるが、胴部外面は土見せとなっている。内外面ともに、軸が縦方向に垂れた痕跡が認められる。なお、遺存部分には茶筌による擦痕はみられない。轆轤成形。瀬戸・美濃系。残存率が低く、全体の器形が不明であるため、時期の特定は困難であるが、16世紀末と推定される。

56は、B-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗（天目碗）である。現存高1.9cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土は灰黄色で、白色粒と砂粒子を僅かに含む。焼成は良好。内外面ともに鉄軸である。轆轤成形。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため、時期の特定は困難であるが、16世紀末～17世紀前半と推定される。

57は、C-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗（天目碗）である。現存高2.0cm、残存率は5%以下の小破片である。胎土はにぶい黄橙色で、黒色粒子と砂粒子を僅かに含む。焼成は良好。内外面ともに鉄軸である。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため、時期は特定できなかった。

58は、C-3グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗（天目碗）である。現存高1.8cm、残存率は5%である。胎土は灰黄色で、白色粒子と黒色粒子を僅かに含む。焼成は良好。外面は、上端部に鉄軸がみられるが、それ以下は土見せとなっている。内面は鉄軸である。外面に比べ内面が傷み、軸が擦れているのは、茶筌によるものであろうか。轆轤成形。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため、時期は特定できなかった。

59は、E-2グリッドからの出土である。種別は陶器、器種は碗である。現存高1.3cm、底径4.6cm、残存率85%である。胎土は灰黄色で、白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は良好。内面は灰軸で、見込みに軸溜りがみられる。胴部外面～高台内は土見せとなっている。轆轤成形で、削り出し高

台である。瀬戸・美濃系。全体の器形や法量が不明であるため、時期は特定できなかった。

60は、C-4グリッドからの出土である。種別は磁器であり、器種は碗であると考えられる。現存高2.5cm、残存率5%。胎土は灰白色で、黒色粒子を含み緻密である。焼成は良好。内外面に透明釉が施される。外面には、草花文と思われる筆描きによる染付けをもつ。轆轤成形。肥前系と推定される。小破片であるため時期の特定は困難であるが、遡っても17世紀前半であると考えられる。

61は、D-2グリッドの南西斜面下から出土した須恵器の甕と推定される。現存高5.7cm、残存率5%以下の小破片である。外面には、自然釉がみられる。胎土は灰白色で、白色粒子・黒色粒子・針状物質を含む。焼成は良好である。

第35図62～64は、金属製品を一括する。

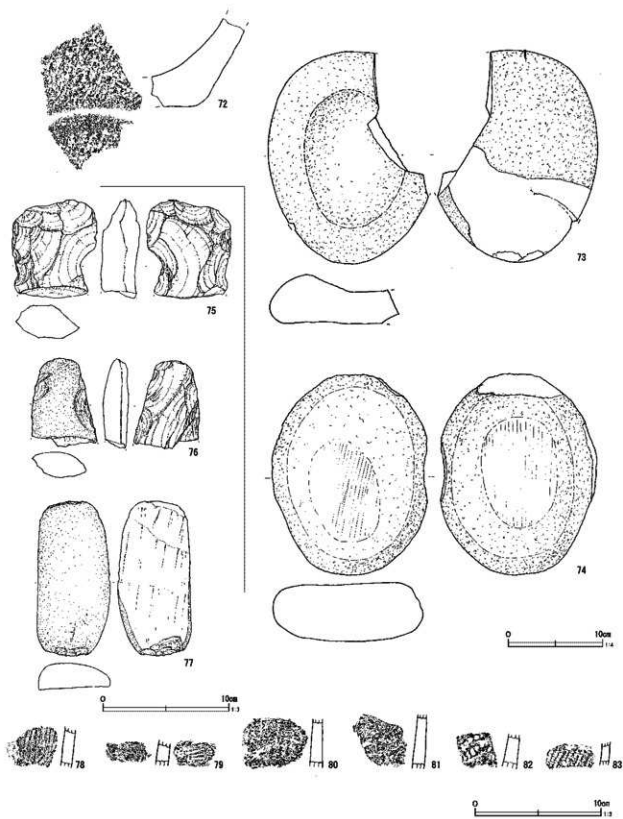
62は、B-4グリッドから出土した鉄製の火打金である。両端部の一部を欠くが、遺存状況は比較的良好である。現存長5.7cm、最大幅2.7cm・厚さ0.3～0.4cm、重さ23.0gを測る。残存率は90%程と思われる。打面中央が少し湾曲しているのは、火打石への敲打による結果と推定される。

63は、一括遺物の鉄製品である。一方は欠損している。錆化著しいが、その形状・法量から刀子の先端部分と推定される。現存長4.5cm、最大幅2.2cm、最大厚0.15cm、重さ11.1gを測る。

64は、C-2グリッドの斜面部分から出土した「寛永通宝」であり、背面に「元」の文字を有する。銭径2.2×2.2cm、銭厚0.1cm、重さ2.7g。完形。遺存状況は比較的良好で、文字も鮮明に読み取ることができる。

第35図65～71は板碑（板石塔婆）である。石材は全て緑泥片岩である。いずれも破片資料のため全体の大きさは不明であり、また65～69は裏面に剥離している。従って、下記には現状の大きさを（高さ×幅×厚さ）で示しておく。

65は碑面に薬研彫りの線刻が認められ、文字（梵



第36図 出土遺物(4)

の線刻が認められ、文字(梵字)と思われる。文字の特定は難しいが、配置的には文字列の末端に位置するものと考えられる。66(7.4cm×5.1cm×0.8cm)は小破片で裏面の剥離も著しい。破片中央の線は部分的に残されているが、槽溝を描いていたと考えられ、その下端に3本の縦方向の線刻が認められる。これらは蓮実の一部と思われる。また、破片下両側を深く弧状に彫っており、蓮弁の一部と思われる。67(6.1cm×7.4cm×1.4cm)は碑面に何箇所か線刻が認められるが、部分的に残されているため、どの文様(文字)なのかは特定できなかった。68(10.7cm×8.2cm×1.5cm)は碑面に幅0.4cmほどの線が刻まれている。69(12.4cm×13.6cm×1.7cm)は破片右端に僅かに3文字が認められる。中央が辛うじて「月」と読めることから、紀年銘の一部と考えられる。上下は数字の可能性が高い。70(14.8cm×12.9cm×1.7cm)は破片下端を舌状に加工しており、基部の一部と考えられる。71(18.3cm×32.7cm×3.5cm)は破片両端と下端に粗い調整痕が残されており、基部の一部と考えられる。また、上端を平坦に切断しており、再利用された可能性がある。

第36図72~77は石製品を一括した。

72は石鉢である。石材は安山岩である。底部の一部のみ残されているが、おそらく底径が25cm以上になるものと思われる。外面と底部は工具による整形痕が残されており、内面は非常によく磨かれている。重さは499.7gである。

73・74は礎石と思われる。73は右側上半部を欠損する。大きさは長さ22.5cm、幅17.0cmで重さ2059.1g、石材は砂岩である。正面の凹は自然に因るもので、人為的加工は観察されない。74の大きさは長さ21.3cm、幅16.5cm、重さ3480.6g、石材は安山岩である。正面と裏面の中央部に磨耗痕が観察される。

75・76は打製石斧である。75は下半部を裏面方向からの力によって欠損している。大きさは現存

で長さ7.8cm、幅6.8cm、幅3.1cm、重さは83.5gである。石器石材は砂岩が用いられている。形状は基部両側縁に抉りが見られることから銅網形を呈すると思われる。76は下半部を裏面方向からの力によって大きく欠損する。大きさは現存で長さ7.0cm、幅5.2cm、厚さ2.1cm、重さは158.2gである。石器石材はホルンフェルスが用いられている。基端部の形状から短冊形を呈すると思われる。2点とも縄文時代の所産である。

77は敲石と思われる。裏面側は欠損するが、下端部の敲打部からは剥離が裏面にも見られることから、本状態でも使用されたと考えられる。大きさは長さ12.3cm、幅5.8cm、重さは219.8gである。石器石材は砂岩が用いられている。帰属時期に関しては不明であるが、縄文時代の可能性が想定される。

第36図78~83は縄文土器を一括した。いずれも小破片で、遺構等に伴うものではない。

78・79は、C-2グリッドから出土した。早期後半の貝殻条痕文系の土器である。78は、縦位の条痕文が施されるもので、胎土は砂質で白色粒子を多く含む。79は、砂粒は含むもの前者よりは緻密な胎土で、裏面に横方向の条痕文が認められる。

80~82は、いずれも胎土に繊維が含まれるもので、前期前葉の花積下層式と思われる。80・81は、断面が黒色で胎土に繊維痕も顕著である。表裏面とも風化が著しく、文様は認められない。80はC-3、81はD-3グリッドから出土した。82は、灰白色の厚手の土器で、胎土にはわずかながら繊維の混入が認められる。平滑でない表面には、複節縄文LR Lが施されている。C-2グリッドから出土した。

83もC-2グリッドから出土した。単節LRの細かい縄文が施される。緻密な胎土で、内面は丁寧に磨かれている。前期後半の諸磯B式と思われる。



## V 調査のまとめ

### 1. 銭小田遺跡

銭小田遺跡の所在する富田地域は、外秩父山系東端を形成する丘陵と、荒川右岸に広がる河岸段丘によって構成されている。また、丘陵先端部は吉野川や谷津川に沿った谷によって分断されており、遺跡はその奥、鷲丸山（標高約210m）を中心とする掌状に発達した尾根の一つに立地する。鷲丸山から北北東に伸びる尾根は次第に高度を減じ、その先端近くの比較的平坦な部分に占地している。標高は135mほどである。今回、遺跡範囲の南半分が調査され、縄文時代の堅穴住居跡1軒と土塚4基が発見された。但し、住居跡の大部分は北側の調査区域外に遺されており、遺跡の中心も北側の保存部分にあるものと思われる。また住居跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 時期としてよいであろう。

北側を上武山地、西側から南側を外秩父山地に囲まれた寄居町では、荒川によって形成された河岸段丘を中心に縄文時代の遺跡も数多く発見されており、特に右岸には南大塚遺跡（早期～中期、高木他1982・小林2001）、東原遺跡（前期、関2004）、甘粕原遺跡（前期・中期、並木他1978）、増善寺遺跡（中期、宮崎1982）、むじな塚遺跡（前期・中期、今関1990・石塚1998）をはじめ著名な遺跡も多い。但し、いずれも上位の河岸段丘、いわゆる江南台地上に立地する集落遺跡であり、奥まった丘陵の狭い尾根上に営まれた銭小田遺跡は、数少ない調査例の一つと言える。もっとも、このような尾根の上では平坦な部分は極めて少なく、集落というよりは、むしろ狩猟などの際のキャンプ地としての利用を考えたい。

また、遺構には伴わないものの、縄文時代早期から中期にわたる遺物が出土しており、西側に一つおいた尾根上の伝田不動寺跡でも、同様に縄文時代早期～前期の資料が検出されている。南北と

東側を谷に囲まれ、独立した丘陵状を呈する鷲丸山には、掌状に広がった尾根筋を廻る狩猟・採集の「道」を想定したい。

なお、出土した黒曜石原石については、長野県男女倉産との分析結果がでており（大屋他2008）、直線距離でも100km近くを隔てた霧ヶ峰付近から持ち込まれたものようである。しかも、このように良質な原石は石器材料として貴重であり、未使用の状態で出土することは稀である。今回は、1点だけの出土のためその位置づけは難しく、所属時期も明瞭ではないが、他の資料と同様縄文時代の所産だとすれば、石材交流の観点から興味深い資料と言える。遺跡周辺にも黒曜石製の石器を出土する遺跡は多いが、原石の出土例は少ない。その一つ、縄文時代早期の条痕文系土器を主体とする川本町（現深谷市）百済木遺跡では、遺構には伴わないものの15点の黒曜石原石が出土している（村松2003）。あるいは、小鹿野町の合角ダム関連遺跡として著名な塚越向山遺跡（小林他1995）では、住居跡（縄文時代中期末）の炉跡に設置された注口土器内に磨製石斧10点とともに黒曜石原石3点が納められており、特殊な埋納例として注目される。また、原石ではないが、大滝村（現秩父市）の入波沢遺跡（縄文時代後期前葉）では、出土した黒曜石（石鏃と剥片）の原産地分析を行っており、長野県和田峠産と報告されている（渡辺2000）。原産地の限られた黒曜石については、従来いくつかの搬入ルートが想定されているが、このような黒曜石の分布状況を考慮すれば、霧ヶ峰周辺から秩父、そして寄居を結ぶ黒曜石の道も想定できるかもしれない。

## 2. 伝旧不動寺跡

伝旧不動寺跡は、銭小田遺跡と同様、鷲丸山から北に延びる尾根に立地し、先端部付近の斜面を削って造られた平場である。もともと地元では、古い時代の不動寺（旧不動寺）があったと伝えられていた場所である。試掘調査の結果、礎石の一部が見つかったことから調査の運びとなった。

不動寺をめぐる地勢については、『新編武蔵風土記稿』（文政11年、1828）が参考となる。同書「富田村」の項に「山川」の節があり、「鷲丸山（山土（上）に富士浅間の小社あり）、天神山、車山（何れも村の西の方にあり）、吉野川（村の中程を流れる）」とある。また、富田村の内とされた谷津村には、「堂之入山（村の東の方にあり）、吉野川（村の中央を流る）」があったとされる。

つまり、谷津村に近い伝旧不動寺跡は、富田村の「鷲丸山」に営まれた遺跡であり、谷津村が領有する山ではなかった。なお、谷津村は、谷津川を隔てた「堂之入山」を領有していた。

さて、『新編武蔵風土記稿』には、不動寺をめぐる興味深い記述がみられる。不動寺には、真福寺、光明寺、福王寺、浄念寺、寶光寺、寶性寺、永光坊、杉本坊と呼ぶ八寺院が門徒の寺となっており、小被神社、大神宮、天神社、浅間社などの神社を管理下に置き、不動寺の境内にも清滝権現社、稲荷社などの社を設けていたというのである。また、不動寺は鐘樓門を設け、天明2年（1782）に鋳造された鐘を吊るしていたという。ただし、現在は、新しく鋳直された別の鐘が吊るされている。

さらに『新編武蔵風土記稿』は、不動寺について、新義真言宗の京都知積院の末寺であり、「大聖山明王坊真言院」と呼ぶ寺であったと記す。そして、本尊の不動明王像は、大山不動と同木を用いた作品と伝える。また、不動寺の開山された年は明らかではないが、元成法印が開山したという。

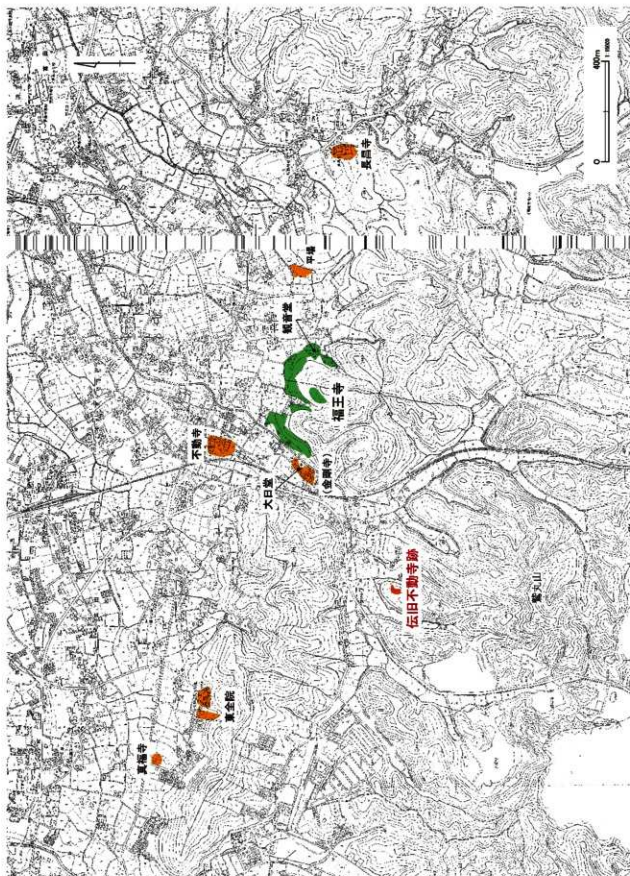
『新編武蔵風土記稿』の記された文政11年（1828）まで26世を数える。

ところで、不動寺の法灯を守る富田地区の人々によると、「古く富田の不動寺は、鷲丸山の山中にあったが、あるとき火災にあい現在の場所に移ってきた」と永年にわたり伝えられてきた。たしかに今回、発掘調査をおこなった調査区は、本田技研株式会社の所有となる以前は不動寺の所有する土地であった。そのため、遺跡名も「移転前の不動寺が、かつてあったと伝えられている場所」ということで「伝旧不動寺跡」とされたわけである。

しかし、発掘調査の結果、伝旧不動寺跡には焼土層や炭化物の広範囲な広がりが無く、火災の証拠は確認できなかった。また、平場の出土遺物は16世紀から17世紀前半に集中していること、あわせて現在の不動寺の東側隣接地（不動寺遺跡）で鎌倉時代から室町時代の遺構、遺物が出土したことなどから、現在の不動寺へ伝旧不動寺跡から移転したとは考えられない。

そこで、注目すべきは、①天正20年（1592）の「富田村検地帳」（註1）、②元禄7年（1694）「不動寺除地新編出入りの返答書」（註2）、③文政11年（1828）の『新編武蔵風土記稿』「富田村」条（註3）、④天保13年（1842）「富田・赤浜村境界訴訟裁許絵図」（寛文12年（1672）の写し）、⑤明治4年（1871）の「廃寺につき達」、⑥『武蔵国郡村誌』「富田村」条に掲載された旧富田村の寺院についての記載である。

まず、①「富田村検地帳」は、小田原の北条氏康が豊臣秀吉によって滅ぼされ、徳川家康が関東に入国してから間もない時期に行われた検地である。この検地帳には、田畑の等級を記した後、小地名や寺、屋敷、宮などに基づくランドマークを掲載し、耕作面積、収穫量、所有者、耕作人を書



第37図 福王寺と周辺の十世寺院



第38图 福土寺周辺区

き上げている。ここに天正20年、富田村に存在した寺院の一部を確認することができる。

この検地帳に登場する寺院名は、福王寺、金剛寺、信光院、当明寺、宝生寺、長谷寺、不動寺の七寺と、東坊、大正坊、満蔵坊の三坊、そして辻堂と呼ぶ堂、さらに堂下、寺ノ入、薬師などの地名が見られる。天正20年には『新編武蔵風土記稿』に登場しない寺院が存在したかもしれない。

なお、「小僧田」という小地名が頻出する。伝旧不動寺跡の丘陵を隔てた谷の水田を「小蔵田」と呼び、同一の地名かと思われる。

つぎに百年後の②「不動寺除地新編出入りの返答書」によると、不動寺、東全院、福王寺、真福寺、長昌寺が富田村の五ヶ寺として認識されていた。東全院、真福寺、長昌寺は、「富田村検地帳」に登場しない。なお、東全院は、検地帳以降に建立されたことが明らかな寺である。それは、東全院が、富田村に知行を受けた青木尾張守信種が、慶長4年(1599)2月10日に建立した寺だという記述が『新編武蔵風土記稿』にあるからである。しかし、真福寺、長昌寺は、いつ建立されたか明らかではない。

この③『新編武蔵風土記稿』「富田村」条には、淨念寺、寶光寺、寶性寺、永光坊、杉本坊の五ヶ寺が、文政11年(1828)に廃寺となっていたとある。なお、寶性寺とは、「富田村検地帳」にある宝生寺のことである。この段階、富田村には、東全院、不動寺、真福寺、光明寺、福王寺、また富田の分村「無禮村」に長昌寺が存在していたこととなる。

第4表 不動寺関連寺院の変遷

文書の記録	寺院名	福王寺	金剛寺	信光院	東全院	当明寺	光明寺	宝生寺	長谷寺	真福寺	長昌寺	淨念寺	寶光寺	寶性寺	辻堂	東坊	大正坊	満蔵坊	永光坊	杉本坊	堂下	寺ノ入	薬師	
		富田村検地帳	天正20年(1592)	○	○	○	○	○	○	○	○						○	○	○					○
不動寺除地新編出入りの返答書	元禄7年(1694)	○			○					○	○	○												
新編武蔵風土記稿	文政11年(1828)	○			○	○				○	○	○	○	○										
廃寺につき達	明治4年(1871)	○								○	○	○	○											
武蔵国郡村誌					○					○														

※「○」は文書に登場する寺、「○」は廃寺となっていた寺

なお、光明寺は、「富田村検地帳」の当明寺かもしれない。

ところで、④寛文12年(1672)に書かれた「富田・赤浜村境界訴訟裁許絵図」を天保13年(1842)に写したとされる絵図では、中央やや南に不動寺が描かれている。朱塗りに柱に漆喰壁の建物が表現され、「不動寺」という表記もみられる。その南には、天神山や鷲丸山、堂ノ入山などが続くが、山麓に民家や朱塗りの柱で建物を表現した神社仏閣がみられる。

不動寺の東には、「大明神下屋敷」とある。ここは、かつて小被神社があった場所という。その南には、大きな建物と小さな建物群が描かれている。熊谷街道の赤浜宿を除くと、民家はほとんど描かれていないことから、大きな屋敷か神社仏閣と考えられる。福王寺や真福寺であろう。また、その東には、比企郡小川町に続く谷筋と街道が描かれ、そこに寺社が書かれている。これは牟礼村の長昌寺である。

さらに、不動寺から南にのびる道は、吉野川と交わる。その途中、吉野川を巨る手前に小さな建物が描かれている。谷筋の大日堂である。この道は、そのまま南に向かい、山中で消える。鷲丸山に向かう山道である。

この絵図を写した天保13年、または寛文12年に、伝旧不動寺跡が存在していれば、ランドマークとして、この山中に必ず描かれたはずである。しかし、その痕跡すらみられない。これは、伝旧不動寺跡の平場の利用が、途絶えていたからに他なら

ない。それは、出土遺物が17世紀前半で終焉を迎えることと合致している。

なお、不動寺の西側、山の北に広がる建物群は、天神山の北斜面に建てられた東全院である。

さて、明治4年(1871)、浦和県庁から⑤「廃寺につき達」という文書が出された。この文書によって真福寺、常念寺、光明寺、福王寺の四ヶ寺が、すでに廃寺となっていたことがわかる。文政11年(1828)に廃寺だった浄念寺(常念寺)のほか、真福寺、光明寺、福王寺といった不動寺の門徒の寺が、廃寺となっていた。これによって不動寺は、八ヶ寺以上あった門徒の寺を明治初年までにすべて失ったこととなる。

そして、明治末年の⑥『武蔵国郡村誌』によると、富田村に不動寺と東全院、牟礼村に長昌寺がみられるだけとなる。なお、東全院は、明治9年(1876)全山が焼失し、主要な堂宇は焼けたが、平場は今でも谷筋に沿って数ヶ所残る。また、堂宇の東側は、墓地となっている。なお、本堂と庫裡は再建された。

ところで、「富田村検地帳」に登場する金剛寺は、その後の文書史料から欠落した寺院である。しかし、谷津地区の大日堂に納められていた大日如来坐像の胎内銘には、天正3年(1575)乙亥12月15日に「奉造立大日富田郷谷金剛寺本尊也」とある。この仏像が、金剛寺の本尊だったことを考えると、大日堂こそ金剛寺である可能性が高いという。なお、この胎内銘には、「光蔵寺」という寺も登場する。

さて、史料に登場する寺のうち、現在でも法灯を保つ東全院、不動寺、長昌寺のほか、福王寺、真福寺の所在が明らかである。真福寺は、いまま墓地に五輪塔の残欠が残る。なお、真福寺は、山号を天満山といい、地藏菩薩像を本尊としていたという。

福王寺は、明治以降も富田村の小学校として活用され続けた。『武蔵国郡村誌』には、「公立小

学校 村の東方廃寺を仮用す。生徒男百五十二人女四十三人」とあり、『男衾村教育史』(大正11年稿)には、富田村不動寺に富田小学校が設けられたとある。

はたして、富田小学校が不動寺に置かれたのか、廃寺となっていた不動寺の門徒の寺である福王寺に置かれたのか、判断しがたい。しかし、現在でも堂ノ入山の北麓に展開する数々の平場を「福王寺跡」と呼んでいることや、この小山を「堂ノ入山」と呼んでいることは無視することはできない。なお、福王寺は、山号を南高山といい、不動明王を本尊としていた。

堂ノ入山の東麓には、焼失した観音堂のあった場所が、平場として残っている。応永(カ)□年の銘を持つ板石塔婆や五輪塔の空風輪などが、観音堂跡の北側に集められている。そして、墓地は、こぶ状に突出した丘陵端を取り巻くように建てられている。

また、観音堂の北には、丘陵の東端を箕の形に切り土し、伝不動寺跡のように平場を整地した場所があり、ここに堂宇が立てられていたと考えたい。平場の南側には窪地が残り、池があったかもしれない。この平場の北側にも緩斜面を切り土して、小形の平場を造成した場所に清龍権現社の小祠や稲荷社の社殿などがあつた。

ところで、この堂ノ入山の北側入り口には、中世石造物が散見する墓地と小祠がある。墓地には、初期の大形板石塔婆や無縫塔などがあり、小祠には、小型の板石塔婆や五輪塔の水輪、宝篋印塔の基礎などが集められている。

とくに、宝篋印塔の基礎には、応安6年(1373)10月の年号が残り(註4)、41人の法名を持つ人々が、仏教を学び「法界」の平等な利益を得ることを願い、この塔を建てたという内容の銘が残る。ここに登場する人々は、富田村を始めとした周辺地域の名主といわれる。

また、近くの墓地にある初期の大形板石塔婆は、

寄居町のみが存在する「頂部を傾斜させた技法」の板石塔婆である。年号や銘は明らかではないが、分厚いつくりや大きさが、不動寺や大日堂の板碑とともに技法的に共通し、13世紀中葉の同工品と考えられている。

不動寺には、康元2年(1257)、元享2年(1322)、応安8年(1375)、そして年号不詳の板石塔婆が、鐘楼門の門前に集められている。とくに康元2年(1257)の板石塔婆は、連座や花瓶を描いた下に「□口願主年七十四」と刻んだ初期板石塔婆(町指定文化財)である。

さらに不動寺には、応永8年(1401)銘の宝篋印塔の基礎がある(註5)。五輪塔の水輪や空風輪とともに寄せ集め、重ねて塔としている。多数の法名や氏名、官職などが書き連ねられ、現世や来世の安穏を願ひ建立した塔であると刻まれている。

また、前述した大日堂には、寛元元年(1243)、文永元年(1264)、貞和5年(1349)など5点の板石塔婆が集められている。とくに、寛元元年(1243)の板石塔婆は、曼荼羅を描いた図像板碑として県指定文化財とされている。中央に大日如来をおき、宝輪如来、普賢菩薩、開敷華王如来、文殊師利菩薩、阿弥陀如来、観自在菩薩、天鼓雷音如来、弥勒菩薩を蓮の花弁の上に梵字でめぐらし、弁の間に三鈴を描く。この板石塔婆と文永元年のそれが、前述の初期大形板石塔婆の一群である。

ところで、大日堂は近年、火災によって焼失したが、谷津地区の人々の努力によって再建されている。この大日堂の東は、吉野川が蛇行しながら北に向かって流れている。大日堂の東は、その一部を池として取り込んでいたようである。南側の墓地群や大日堂の北側を含めた一帯が、金剛寺であった可能性が高い。

また、不動寺の立地を観察すると、東北にのびる丘陵の東辺を箕の形に削り込み、平場を整地している。その北奥に本堂を建て、崖下に池を作り、

南に鐘楼門を設けている。東全院も天神山から北にのびる樹枝状の地形を活用し、丘陵の東辺を箕の形に削り込み、平場を整形している。東に清水の溜まる谷地があり、現在は、蓮田となっている。

長昌寺も同様である。やはり、東北にのびる丘陵の東辺を削り込み、平場を造成し、そこに建物群を設置している。不動寺をめぐる各寺院が、丘陵東辺を箕の形に削り平場とし、その東側には、南の山麓から湧き出た清水を集めて小河川(沼、池)をつくり、北へ流れるという同様の立地条件であった。

おそらく、初期大形板石塔婆の寄居町富田地区における集中的な建立を踏まえて考えると、13世紀から17世紀にかけて、とくに16・17世紀、男衆郡と比企郡の境となる山麓地帯に、不動寺を中心とした宗教的建物群が、次々と建立されたと考えたい。そして、江戸時代から明治時代にかけて、維持することが困難な寺院が現れ、ついに長昌寺、不動寺、東全院、大日堂(金剛寺)の四寺に淘汰されてしまった。

ところで、伝旧不動寺跡は、立地条件や平場の状況、不動寺の所有地であったということなどから、不動寺をめぐる寺院群の一つと考えられ、灯明皿、すり鉢、鉦皿、焙烙、常滑焼大甕、石組み井戸などから、この平場で一定の生活が行われていた痕跡を窺うことができる。

文献史料に登場する寺院の中で、その場所を特定できなかった当明寺(光明寺)、宝生寺(寶性寺)、長谷寺、浄念寺(常念寺)、寶光寺、信光院、辻堂、東坊、大正坊、満蔵坊、永光坊、杉本坊のうち、伝旧不動寺跡から200年後の文政11年(1828)に廃寺として名をとどめる宝生寺(寶性寺)、浄念寺(常念寺)、寶光寺、永光坊、杉本坊は、ひとまず除き、明治4年(1871)に廃寺となった当明寺(光明寺)も除くと、信光院、辻堂、東坊、大正坊、満蔵坊などが残る。

東坊は、「富田村検地帳」で福王寺が作人とな

る所有者であり、福王寺の近くにあった堂ノ入東麓の坊と考えたい。また、辻堂は、街道の交差点に立てられた堂であろうから除かれよう。なお、大正坊は、金剛寺領の耕作者である。

このように選択していくと、伝不動寺跡は、信光院、大正坊、満蔵坊といった寺院、あるいは文献史料に登場しない不動寺にかかわる寺院（坊や堂）と結論することができる。

註1 天正二十年(1592)「富田村検地帳」『寄居町史』近世資料編 昭和58年 寄居町教育委員会町史編さん室

- 27 下畠 吉田地起二せ 壹反廿四歩 四斗三升貳合 東坊分 福王寺作
- 204 下畠荒 寺入 拾六歩 貳升貳合 新十良分 新十良
- 250 下畠 六所起 拾八歩 貳升四合 金剛寺分 大正坊作
- 270 下畠 起 貳畝四歩 八升六合 無連分 満蔵坊作
- 298 下畠荒 金剛寺 七畝拾歩 貳斗九升四合 金剛寺分 中兵衛
- 300 下畠 金剛寺起 三畝歩 壹斗貳升 金剛寺分 中兵衛作
- 305 下田荒 関場 壹畝拾八歩 壹斗壹升貳合 金剛寺分 中兵衛
- 310 下畠 業師之脇起 壹畝六歩 四升八合 番匠分 源兵衛作
- 359 下畠 信光院起 五畝廿六歩 貳斗三升四合 谷分 源十良作
- 365 下畠 向内出起 貳畝廿四歩 壹斗壹升貳合 東坊分 弾左衛門作
- 366 下畠 六所起 五畝廿六歩 貳斗三升四合 金剛寺分 同人(弾左衛門)作
- 370 下田荒 三反田 壹反三畝歩 九斗壹升 是へ分 当明寺
- 407 中畠 金剛寺起 三畝六歩 貳斗貳升四合 同人(新十良分 惣右衛門)作
- 453 下畠 寺ノ入起 貳畝廿歩 壹斗六合 杉山 新十良分 外記助作
- 575 下田 堂下 壹畝貳歩 七升五合 下富田分 新左衛門作
- 595 中畠荒 根岸まへ 貳畝四歩 壹斗五升 水野分 東坊作
- 600 下畠荒 花之木吉田地 壹反六畝歩 六斗四升 丹波分 東坊
- 603 下畠荒 宮地 四畝歩 壹斗六升 二好寺分 同人(又二良)
- 626 下畠荒 宮地 六畝歩 貳斗四升 大好寺分 宝生寺
- 643 下田 辻堂起 貳畝廿八歩 貳斗八合 同(水野)分 同人(六右衛門)作
- 646 下田荒 辻堂 四畝廿四歩 三斗三升六合 水野分 六右衛門
- 687 下畠荒 定久 貳反九畝拾四歩 壹石壹斗七升八合 長谷寺分 同人(与五右衛門)
- 792 下畠荒 宮路 六畝貳歩 貳斗四升三合 大好寺分 大蔵坊
- 799 下畠 宮地起 壹反貳畝貳拾四歩 五斗壹升貳合 大好寺分 不動寺作
- 802 中畠 藤左衛門屋敷起 八畝廿四歩 六斗壹升六合 水の分 不動寺作
- 826 下畠 中間戸起 四畝歩 壹斗六升 不動寺分 藤右衛門作
- 908 下畠 中間戸起 六畝廿八歩 貳斗七升八合 不動寺分 [ ]
- 953 居屋敷 金剛寺 壹畝六歩 壹斗二升 [ ]
- 960 居屋敷 金剛寺 貳畝六歩 貳斗貳升 中兵衛
- 961 居屋敷 信光院持 貳畝廿歩 貳斗六升六合 単人助
- (内田邦次家蔵 文書番号1) ※数字は、検地帳に登場する順番



註2 「不動寺除地新観出入の返答書」

〔前略〕 富田村ニ寺五ヶヶ御座候所、先規より御一領一ヶ寺ツゝと申伝候、依之東全院と申嶋角左衛門様御領分、真福寺と申ハ松下半之丞様御領分、福王寺と申ハ西村又右衛門様御領分、長昌寺と申ハ杉浦内蔵允様領分、不動寺と申ハ拙者共地頭石河喜左衛門様御領分と申伝来候て、(後略)〕

(嶋田邦孝家蔵 文書番号 五)

註3 『新編武蔵風土記稿』(巻223 男舎部之二)

東全院 禪宗曹洞派、原村東國寺の末、富保山と號す、本尊正観音を安ず、開山英旭慶長四年二月十日化す、開基は青木尾張守信種、法名富保院久山全長、慶長三年九月朔日卒す、尾張守は武川衆と稱して、御入國の後當村を知行せしことは、村の惣説にいへり、 秋葉社

不動寺 新義眞言宗、京都積徳院の末、大聖山明王坊眞言院と號す、本尊不動は大山不動と同木同作と云傳ふ、開山元成法印遷化の年代詳ならず、當住まで二十六世に及と云、 鐘樓門 天明二年鑄造の鐘をかく、 清龍權現社

稻荷社 ○眞福寺 不動寺の門徒なり、下七ヶ寺同じ、天滿山と號す、本尊地藏、○光明寺 高照山と號す、本尊千手観音、○福王寺 南高山と號す、本尊不動、○淨念寺 廢寺となりて未だ再建せず、下四カ寺同じ、○寶光寺 ○寶性寺 ○永光坊 ○杉本坊

(中略)

長昌寺 天台宗、赤濱村普光寺の末、高淨山泉龍院と號す、本尊釋迦、 撞鐘 寶曆年中鑄造の鐘なり、○觀性寺 同末にて稻荷山藥王院と號す、本尊藥師、

註4 福王寺宝篋印塔基礎銘文

(基礎第一面第一区) 代別当 重門良賢能智 良慶頼有慈慶

(第二区) 祐弁守東明觀 祖源良門清弁 良安宗弁○帳

(第二面第三区) 良尊法性快賢 榮範重弁良宗 秀賢賢秀良明

(第四区) 良口妙阿明堂 良法妙法性覺 德妙唯明經心

(第三面第五区) 国阿良門明安 明妙榮印

(第六区) 右志趣者为依 比功力忽常處三

(第四面第七区) 身門滿之覺位 乃至法界平等利益

(第八区) 応安六年癸丑十月

結束

敬白

註5 不動寺宝篋印塔基礎銘文

銘文

(基礎第一面第一区) 契智清弁越中 重口仁侍從 契潤刑部山城

(第二区) 成珍刑部父母 讚岐良尊形部 快俊能登法虎

(第二面第三区) 榮尊法永榮宗 妙口越後備前 播摩和泉清祐

(第四区) 快能常木吉阿 夷門道門道明 推念道觀教口

(第三面第五区) 口徳口口口口 守吉口口口口 口(次)口(郎カ)口口口口

(第六区) 大工苗觀教覺 良榮口(九カ)阿父母 正門妙金口口

(第四面第七区) 美作口口口口 明阿口口口口 右為口口口口

(第八区) 女逆修作善七分全 得口口口口口 敬口口

応永八辛巳十月十五日

白口口

## 引用・参考文献

- 石塚三夫 1994『中小前田1遺跡』寄居町遺跡調査会報告第1集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1995『町内遺跡2』寄居町文化財調査報告第13集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1995『町内遺跡3』寄居町調査報告第14集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1996『末野元宿遺跡』寄居町遺跡調査会報告第9集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1997『中小前田2遺跡・小前田3号墳』寄居町遺跡調査会報告第14集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1998『むじな塚遺跡(第5次)』寄居町遺跡調査会報告第16集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1998『史跡鉢形城跡』平成9年度発掘調査概要報告 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1999『史跡鉢形城跡2』平成10年度発掘調査概要報告 寄居町教育委員会
- 井上高明・石塚三夫 1995『東伴場地遺跡(第5次)』寄居町遺跡調査報告第3集 寄居町教育委員会
- 井上 肇・石塚三夫 1994『町内遺跡1』寄居町遺跡調査報告第12集 寄居町教育委員会
- 今井 宏 1994『桜沢窟跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集
- 今関久夫 1990『むじな塚跡群』寄居町文化財調査報告第8集 寄居町教育委員会
- 大黒道則 他 2008『石器材料および石器の理化学的分析値(3)』『研究紀要 第23号』財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 小林 茂・田部井功・深田芳行・橋本康司 1995『秩父・合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』合角ダム水没地域総合調査会
- 小林 高 1997『町内遺跡5』寄居町文化財調査報告第17集 寄居町教育委員会
- 小林 高 2001『南大塚遺跡(第3次)』寄居町遺跡調査会報告第21集 寄居町遺跡調査会
- 小林 高 2006『赤浜牛無具利遺跡』寄居町遺跡調査会報告第29集 寄居町遺跡調査会
- 小林 高 2007『不動寺遺跡』寄居町遺跡調査会報告第31集 寄居町遺跡調査会
- 埼玉県立図書館編 1954『武蔵国郡村誌 第九巻』雄山閣
- 埼玉県立歴史資料館 1992『埼玉の中世寺院跡』埼玉県教育委員会
- 埼玉県立歴史資料館 1998『埼玉中世石造遺物調査報告書』埼玉県教育委員会
- 関 義則 2004『東原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第27集 寄居町遺跡調査会
- 高木義和 1981『稲荷窪遺跡』寄居町文化財調査報告第5集 寄居町教育委員会
- 高木義和・野辺徳秋 1982『南大塚遺跡』寄居町文化財調査報告第6集 寄居町教育委員会
- 利根川章彦 1999『折原石道遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第225集
- 並木 隆他 1978『甘柏原 ゴシン 露梨子遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第35集 埼玉県遺跡調査会
- 伴瀬宗一 1998『要害山城跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第221集
- 福田 聖 1998『末野遺跡1』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集
- 細田 勝 岩田明広 1994『榎ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 宮崎朝雄 1982『増善寺遺跡』財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第5集
- 村松 篤 2003『百済木遺跡』川本町遺跡調査会報告書第8集
- 寄居町教育委員会町史編さん室 1984『寄居町史 原始古代中世資料編』寄居町教育委員会
- 寄居町教育委員会町史編さん室 1986『寄居町史 通史編』寄居町教育委員会
- 蘆田伊人編 1963『新編武蔵風土記稿 第十一巻』雄山閣
- 若松良一・細田 勝 2001『箱石遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第267集
- 渡辺清志 2000『浜平岩陰ノ入波沢西ノ入波沢東遺跡』財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第243集